

複合動詞の式反転アクセントの衰退と維持に関する音韻条件について：
現代日本語のアクセント辞典の現況と明治期以降のアクセント資料の検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 城岡, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026761

複合動詞の式反転アクセントの 衰退と維持に関与する音韻条件について

—現代日本語のアクセント辞典¹の現況と明治期以降のアクセント資料の検討—

城 岡 啓 二

0. 複合動詞のアクセントの変遷について考えるまで

日本語の複合動詞といっても、現況調査の調査対象としたのは、NHK2016であり、アナウンサーの使う標準日本語ということになる。最近の版のNHKのアクセント辞典の編集にあたっては、アナウンサーを対象にアクセント調査を行い、その結果をもとに修整して、ゆれているアクセントをアナウンサー調査によって修正するなど、アクセント辞典の改定にあたっては、全アナウンサーから意見を吸い上げ、アナウンサー自身の発音やアナウンサーが放送にふさわしいと考えるアクセントの調査を行って、その調査結果がアクセント辞典に生かされている（菅野・白田・最上・宗像 1982、塩田 2016）。しかも、現在のアナウンサーは、東京出身者が極端に多いということはない。1996年時点のNHKのアナウンサーの東京出身者の数は、東京生育者は523人中126人だったようである（塩田 2013：254）。つまり、NHK2016のアクセントは、東京語アクセントとはもはや言えないが、現代の放送用の標準語（ないしは共通語）のアクセントを示していると言える点を確認しておく必要がある。

さて、複合動詞の式反転アクセントの衰退と維持には、音韻条件以外にも使用頻度などもかかわると思われるが、本稿の関心は、衰退を推進した音韻条件

¹ 本稿ではとくに断らなければNHKの2016年のアクセント辞典のことを指し、NHK2016と略して示す。他のアクセント辞書類も略記して出典を示す。NHKのアクセント辞典の各版は、初版出版年を付与して、NHK1943、NHK1951、NHK1966、NHK1985、NHK1998、NHK2016のように略す。神保・常深（1932）は神常1932とし、高橋（1904）も同様に高橋1904、寺川・日下（1944）は寺日1944、三省堂のアクセント辞典の各版も秋永1958、秋永1981、秋永2001、秋永2014のようにする。国語辞典でアクセントの記載のあるものも同様に略記し、山田美妙の『日本大辞書』は山田1892とする。三省堂の国語辞典はアクセントの記載のあるものが幾つかあるが、『明解国語辞典』初版は金田一1943、『辞海』は辞海1952とした。さらに、『新明解国語辞典』初版は金田一1972、アクセントが柴田武担当に変わり、馬瀬・佐藤編（1985）の『東京語アクセント資料』の成果を取り入れた第4版は柴田1989とした。『東京語アクセント資料』は複合動詞のアクセント研究に利用されてきたので、これも東京語1985と略記する。また、平山（1940）は「東京アクセント語例」を附録に含んでいるが、これを平山1940とした。

や衰退を抑制して式反転アクセントを維持した音韻条件にある。調査項目は、具体的には、全体の拍数や前部動詞と後部動詞の拍数や前後の拍数の組み合わせや後部動詞のアクセント式である。

複合動詞のアクセントを調査するに至った経緯について述べておくと、筆者は、静岡大学人文社会科学部の言語学の2年生向けの専門科目で『尋常小学国語読本の発音とアクセント』（神保格 1930）を読みながら、現代日本語との違いを考える少人数の授業をこれまで何年か行ってきた。この教材は、大正期から昭和初期まで使われた第3期国定読本の内容すべてに対して発音をカタカナで書き、アクセント表記を付けたもの²である。尋常小学校の1年生から6年生までの国語教材が対象になっている。近過去の資料を読みながら、書かれている内容が理解できるかどうか確認したうえで、自分たちの使っている現代の日本語との違いや現代までの言語変化の道筋を考える授業は、近過去の状況が示されているので、それからの変化の予想が付きやすく、アクセントだけでなくその他の語彙や文法の変化などについても具体的に考えるのに適していると筆者は考えている。明治初年のアーネスト・サトウの『会話篇』やその他の外国人向けの日英会話集なども使ってみたが、現代により近い近過去のテキストの方が比較して考える授業には適しているようである。

発音が付与された教材に頻繁に登場する語彙では、「四・七・九」の数字の読み方が現代とは異なっていて、筆者は、数詞の発音の変化について各種の資料を調べ、数本の論文を書いている（城岡 2009、2011、2013）。個々の語彙のアクセントも現代とは違っていた。本稿でのアクセント表記は、アクセントの下がり目の直前の拍をアクセント核として、語頭からの位置を数字で示す『明解国語辞典』（1943）の方式を使う。平板型は①である。例文のアクセントを示すような場合にもこれを使い、分かち書きの記述対象の語句の末尾にこのアクセント表記を書き加えて、ナンドモ① ナンドモ① ヨミカエシテ① イル① ウチニ①のように示す。神保（1930）で頻出する、現代とことなるアクセントの例をあげると、3拍めがりになるオノマトペのチラリト③、ケロリト③、キラリト③のような例³や、漢語の平板型のキセキ①や頭高型のチューモン①など、

² 国定読本の発音とアクセントを示すのが中心で、解説は巻頭の一般的なものを以外なく、別アクセントの可能性や続けて発音する場合のアクセントを注記するなど、必要最小限の追加記述をしている。この点は、第5期国定読本にアクセントを付け解説をしている三宅（1943）との違いになっている。三宅（1943）の方は、アクセントの規則や変化について、該当箇所、ポイントになる点をまとめ、解説している部分が多量である。

³ 神保1932では③しか載せていないが、NHK1943では、このようなオノマトペのアクセントは②

現代の大学生が使っているアクセントとはことなるアクセントが出て来る。小学校高学年向けまで読み進むと、現代のアクセントとの違いで繰り返し出て来るのは、二つの動詞から出来た複合動詞のアクセントがからんだものである。複合動詞のアクセントについては、同様に小学校国語教材（第5期国定教科書の4学年分）にアクセントを付与した三宅（1943a）があるが、この同じ人が複合動詞のアクセントが前部動詞と反対のアクセントをとる規則性があることを三宅（1934）で二つの規則にまとめている。

【第一則】動詞のアクセントは、その前部語の基本形の前アクセントと『式』が反対になる。即ち、前部語が無契式ならば複合語は有契式に、前部語が有契式ならば複合語は無契式になる。但、次に説く第二則の複合形式を除く。

【第二則】前部語の基本形の前アクセントが○●○⁴の場合には、複合語の新アクセントも○●○○となる。

第一則が式反転アクセントの規定であり、第二則はその例外のうちパターンの決まっているもので、本稿では、長い言い方だが、前部起伏式1語アクセントと呼んでおこう⁵。起伏式の前部動詞のアクセントを残し、後部動詞のアクセント核を消してしまい、1語のアクセントにするものであり、秋永（1999：41）は「前部残存型」と呼び、塩田（2014：255）は「前部型」と名づけ、塩田（2016）は「前部系」としているものである。これについては、3章で扱う。それで、複合動詞のアクセント規則の第一則であるが、三宅（1943a：95）でも説明していて、「連語動詞は、その先行動詞の基本アクセントと反対の『式』となる。即ち、先行動詞の基本アクセントが平板式ならば起伏式に、起伏式ならば平板式となるのである。」としている。三宅自身は、このように、「反対」とい

③になっている。

⁴ ここでは●を使って引用したが、元の文では、○の中央に横棒の入った記号でアクセント核を表記している。「アクセント契楔を含む音節」と定義している。したがって、厳密に言えば、●を「高」、○を「低」の意味で使っているわけではないが、標準語の3拍語であれば、区別する必要はない。この表記で三宅はどこまで感じ取っていたのか不明だが、前部動詞が3拍の起伏式であっても、頭高型のもは想定していないことになるだろう。山田1892にはトールを前部とする複合動詞はないが、神帯1932とNHK1943にはトリーヌケルなどの複合動詞が掲載されているが、前部起伏式1語動詞の複合動詞は存在していない。

⁵ 普通の起伏化した複合動詞のアクセントは後部起伏式1語アクセントであり、方言によっては前部末起伏式1語アクセントもあるようなので、前部起伏式1語アクセントという言い方は起伏式の1語アクセントの分類を想定している。起伏式のアクセント核を語中につただけ持ち、該当箇所以外のアクセント核があれば削除することで1語アクセントになっている。

う表現での説明を繰り返し使用しているが、「反対式」や「式反対」では意味が取りにくいので、本稿では、平板式と起伏式に二分されるアクセントの反転ということで「式反転（アクセント）」と呼ぶことにする。松森・新田・木部・中井（2012：176）では「前部要素と複合動詞のアクセントが逆転する」と述べているが、これでは、何が「逆転」するのか取りにくいし、塩田（2014）は「式保存の逆転現象」という表現を繰り返し使っていて⁶、これなら内容ははっきりするが、「式保存の逆転現象」では、「式保存になっていない」ということを強調することになる。「式保存」との関係が誤解を招きそうである。本稿の筆者は、式反転も前部動詞のアクセントを反転させるが、前部動詞のアクセントは複合動詞のアクセントに保存されていることになると考えている。つまり、式反転は式保存でもあるという観点が重要であると捉えている。そのため、「式切り替え」や「式裏返し」のような言い方もよさそうだが、和語が混じり、術語らしく見えないのと、意図的行為としてのようにも解釈できそうなので、本稿では、これらの言い方も使わず、裏と表の反転というイメージで、起伏式と平板式が入れ替わるということで、「式反転」という表現を採用した。複合動詞の式反転アクセントは現代までの間にかかなり衰退していることが知られていて、これを調査した先行研究も幾つかある。本稿では、起伏式アクセントの前部動詞から作られる複合動詞（1033語）のアクセントについてNHKの2016年のアクセント辞典の記載内容を調べ、とくにどんな場合に式反転アクセントが維持されているのかということに注目して現代の複合動詞のアクセントをめぐる状況についてまとめ、そのあとで、複合動詞のアクセントの式反転規則が衰退したことの帰結を検討する。式反転アクセントの調査で前部動詞が平板式のものを調べていないのは、こちらは、式反転した起伏式のまま基本的に変化していないからである（事例は2.3でウリダスとヒキダスについて見る）。式反転アクセントの衰退と現状の確認後に帰結としてどういう状況になっていると考えるべきか検討する。明治期の『日本大辞書』（山田美妙、1892）と彼が附録として書いた「日本音調論」から始まる近代日本語のアクセント資料並びにアクセント研究を扱い、複合動詞に関して先学の残したアクセント資料とアクセント研究の足跡を利用させてもらい、先学を参考にしながらも、必要な場合には、幾つかの先

⁶ 高山（2012：314）は「核保存の逆転」という表現を使っている。無核・有核の逆転という意味で使っているようであり、「逆転」の意味は分かりやすいが、この捉え方でも、前部動詞の式が反転しながら複合動詞のアクセントに式保存されているという捉え方になっていない点が十分とは思えない。

学の間違いや矛盾を指摘し、複合動詞のアクセントの現況と明治期以降の変遷についてまとめるのが本稿の目標である。

1. 前部動詞と後部動詞から構成される複合動詞のアクセント

複合動詞といっても、前部が動詞以外のものもあるが、本稿で複合動詞と言えば、前部動詞と後部動詞の組み合わせの動詞のことであり、そのアクセントについて論じている。なお、式反転アクセント規則を最初にまとめた三宅(1934)では「複合動詞」という術語を使っているが、三宅(1943a)では「連語動詞」を使い「連語動詞のアクセント法則」と呼んでいる。三省堂のアクセント辞典は秋永(1958)から秋永(2014)までであるが、ここでは、「結合動詞」⁷とされている。

複合動詞のアクセントの特徴は、派生語が多くアクセント式をそのまま保存するのに対して、アクセント式を反転させて保存する点にある。しかも保存するのは、後部動詞ではなく、前部動詞のアクセント式ということになる。ミツケル①では、前部動詞のミル①が起伏式なので、全体が平板式になる。一方、ニル①(煮る)の場合は、ニツケル③、ニツメル③と、ニルが平板式なので、全体を起伏式にすることになる。これが式反転アクセント規則であるが、前部動詞が起伏式の場合のアクセントが変化していて、起伏化の傾向を強めていると言われている。NHK2016の判断でもミオクル①③、ミオトス③①、ミナオス①③のようにすくなくとも第2アクセントに起伏式アクセントが使われるようになってきている。

すこしのちの時代に複合動詞の式反転の衰退には触れずに複合動詞のアクセント規則をまとめたものに平山(1960:910)がある。式反転アクセントがかなりすたれてしまっていることを観察しながらまとめたものと思われるが、ここでは、複合動詞だけでなく、複合形容詞、複合名詞も含めてコンパクトにまとめようとしている。平山(1940:31)ではアクセントの型の総括名としての「アクセントの式」について「これは佐久間博士の発見であるが」と書いていたことから唐突な方針転換であるように思えるが、アクセントの保存関係は重視しない方針に転換したようで、アクセントの「式」という佐久間鼎発案の考え方を捨て、複合動詞のアクセント規則も必要に応じて「平板型」や「起伏型」

⁷ 秋永・坂本(2010:17)によると、複合語を複合の度合いによって、強いものから弱いものまで「癒合語」「結合語」「接合語」に分けると説明されている。そこでは、「晴れ上がる」は結合語、「見て取る」は接合語の例としてあげられている。

というグループ名の「型」を使い、個別の「型」とアクセントの「型」を二大別した「型」を名称では区別せずに、以下の二点で複合動詞のアクセント傾向をまとめている。

- (ア) 上接語が平板型であれば、下接語の型に関係なく、原則として、中・高型になる。
- (イ) 上接語が起伏型であれば、下接語の型に関係なく原則として⁸平板型と中・高型との両型が出る。

これでは、「上接語」が「平板型」か「起伏型」であるかによって全体のアクセントが左右されるということは表現しているが、式反転アクセントという規則性がまったく見えないことになってしまっている。すでに衰退していた複合動詞の式反転アクセントの状況では、これで十分だと考えたのか、式反転アクセントに賛同できないと考えていたのか、今となっては分からない。

1.1 複合動詞の式反転アクセント規則の発見

複合動詞のアクセントについて何らかの規則性があることを見出していたのは、山田美妙 (1892b) であることは間違いないが、正確ではなかったし⁹、アクセントの「式」が佐久間鼎によって考案・発見される前だったので、式反転アクセントの規則性を見つけてはいない。複合動詞の式反転規則が「山田 (美妙) の法則」であるかのように述べる研究者もいる (都竹 1951: 397、相澤 1992: 227、高山 2012、松森・新田・木部・中井 2012: 177)。山田美妙は文学者として有名な人物だったため、「日本音調論」(1892b) については、内容を吟味しないまま複合動詞のアクセントの規則性について「山田の法則」と誤解、ないしは勘違いしている先行研究が、複数、見られるのは、そのために正当な評価が得られない研究者もいるわけで、正しく内容を検討し、評価することが今さら

⁸ 「原則として」の前後には説点を入れた方が上の文の表記との整合性があるが、元のままとした。

⁹ 前部1音と後部3音の複合動詞について、古語など、当時の日本語の説明にあまり適切だとは思えない例をあげ、「前一音後三音ノ和ノ動詞ハスベテ其前後ノ原語ノ音調ヲ其儘ニ残ス」(山田 1892b: 附録48-49「ちのー」)としているが、これでは、『日本大辞書』で山田自身があげている複合動詞のアクセントさえ説明できない間違った内容である。キスワルは、「第三上」(3拍めがアクセント核)、ミタテルを「全平」(先頭拍の高さを正しく捉えていないが、平板型(式)に相当)としているが、これをもとに考えると、前部動詞については、おそらく、「全平」や「第一上」を元に考察することになるので、1拍の起伏式と平板式の区別がつかず、「原語ノ音調」があいまいであるが、少なくとも、後部動詞のアクセントが「原語ノ音調ヲ其儘ニ残ス」にはなっていない。スワルは「全平」、タテルは「第二上」の動詞だからである。前部が3音(拍)の複合動詞のアクセントについては、本論で後述する。

ながら必要であると思われる。複合動詞の式反転アクセントの規則性の発見には、佐久間（1919）によるアクセント式の考え方が必要であったので、山田（1892b）にそのような規則性が見つけられなかったのは当然である。三宅（1934）がまとめた式反転アクセントの規則性から見て間違っていない山田の主張は2拍の前部動詞と2拍の後部動詞の複合動詞のアクセントであるが、「第一上」と「第一上」の複合動詞のアクセントが「全平」になり、「第一上」と「全平」の複合動詞のアクセントが「全平」になるとは書いているが、前部動詞が「第一上」であれば、複合動詞は「全平」になるとまとめてさえない。個別例を指摘しただけで、複合動詞の式反転アクセントの規則性を指摘していたとはとても言えない。「日本音調論」は、実証的な調査をもとに書いた論文のようなものではなく（注の9参照）、『日本大辞書』記載の動詞にもあてはまらないようなやや杜撰な内容であり、思いつきは面白いが、規則を述べたものとは言えない。したがって、「日本音調論」は、その内容ではなく、アクセント（音調）の問題を、近代化以降、最初に表現したことや後世の研究者が彼の研究からインスピレーションを得た点を評価すべきである。三宅（1943b：46）が「現代における東京アクセントの研究は山田美妙に始まるのであります」と書き、平山（1957）の付録が「現代日本語音調研究年表」の714点の文献の最初の出発点が『日本大辞書』と「日本音調論」であるとしたのは正しい評価であろう。しかし、少なくとも複合動詞の関係するアクセントの規則性については、問題点の指摘と規則性が背景にあると考えていたということ以上の内容はなく、実証性が低く、口述筆記させたと言われる『日本大辞書』に掲載されている動詞のアクセントにも適用できない場合があるような内容だったというのが正しい評価であろう。塩田（2014：257）による「山田の個別的な記述を出発点として三宅武郎（1934）において帰納的な一般化が成されたと解釈するのが妥当である」というのが先駆者としての山田美妙を好意的に扱った妥当なまとめ方ということになるだろう。なお、複合動詞のアクセントの規則の発見では、埋もれてしまった感もある三宅武郎であるが、NHKの最初のアクセント辞典（1943）の「編纂主任」¹⁰にもなっている。複合動詞のアクセントだけを指すわけではない

¹⁰ 「編纂主任」というのは、NHKの内部資料にある肩書を塩田（2008：149）が明らかにしたものであるが、辞典自体にはそのように書かれていない。新村出執筆の序文には「最後に、本辞典の作成につきては、囑託三宅武郎氏其他の編纂係員及び放送員諸氏の少なからぬ努力を明記せねばならぬ」とあるだけである。実際は、「複数の委員による一語一語の審議・決定は『力行』の途中までで中断してしまい、それ以降の部分は日本放送協会側の担当者である三宅武郎独力で編集をおこなったと推測できる」と塩田（2008：190）にある。

が、佐久間鼎の発案の「式」を踏まえた考察を複合動詞以外にも行っていて、かつてはそれなりに注目されていたようで、平山（1940：32）に「此の式といふ問題は大変重要なもので標準語に就いては三宅武郎氏の研究が興味をそゝる」と書かれている。

さて、複合動詞の式反転アクセントは、2度適用されることもあるはずで、短い語であれば、複合語がさらに複合するような場合にアクセント式が反転して、もう一度反転する例は、現代でも、それなりにあるのではないだろうか。典型例は、「見つけ出す」や「落ち着き払う」であろう。

- | | | |
|-------------|---|-------------|
| (ア) ミル | ① | 起伏式 |
| (イ) ミツケル | ② | 式反転で平板式 |
| (ウ) ミツケダス | ④ | もう一度式反転で起伏式 |
| (エ) オチル | ② | 起伏式 |
| (オ) オチツク | ② | 式反転で平板式 |
| (カ) オチツキハラウ | ⑥ | もう一度式反転で起伏式 |

前部動詞が平板式の場合で二重に式反転する例として「寝入り込む」をあげておこう。この複合動詞はNHK2016には掲載されていないが、秋永2014では、式反転アクセントが二重に適用される場合が推奨アクセント¹¹として記載されている。

- | | | |
|-----------|----|----------------|
| (キ) ネル | ② | 平板式 |
| (ク) ネイル | ② | 式反転で起伏式 |
| (ケ) ネイリコム | ②④ | ②なら2回めの式反転で平板式 |

ところで、複合動詞のアクセントが三宅（1934）がまとめたように基本的に式反転アクセントだったと本当に言えるのかかどうかという点について、実は、前部動詞が3拍の起伏式の場合以外は検討もされてきていないというのが実態であると思われる。NHKのアクセント辞典の各版の調査で気付いたが、NHK1943では、ツタエキク②、ツタエル②になっていた。式反転アクセントならツタエキクのアクセントに起伏式が使われるところだが、そうになっていなかった。現在ではツタエルとツタエキクの両方のアクセントがゆれていて、NHK2016では

¹¹ 秋永2014の巻頭の「この辞典を使うひとのために」に「二通り以上のアクセントや発音があるものは、標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記した」(p.11)とある。

ツタエル①③、ツタエキク①③になっている。NHK1943のアクセントはツタエル①とキク①なので、前部動詞のアクセント式を全体のアクセント式に拡張したと考えることもできるし、同様に後部動詞のアクセント式を全体のアクセント式に拡張したとも言える。それどころか、ツタエキク①は1語のアクセントではなく、前部動詞と後部動詞の両方のアクセント式を生かした2語のアクセントがかかっているのかもしれない。ここでは、この問題をさらに追及することはしないで、こういう例もあることの指摘だけにしておきたい。前部動詞が3拍の起伏式の場合にも必ずしもナグリツケル② (NHK1943) のような前部動詞のアクセントを生かすアクセントばかりではなかったようであるし、前部動詞のアクセントを生かす複合動詞のアクセントが山田の書いている3音(拍)でなく、3拍以上という条件と解釈もされることがあったり(秋永 1999 : 38)、式反転アクセントにあてはまらなかった例外も複雑な様相である。したがって、三宅(1934)の当時の複合動詞の式反転アクセントにどの程度例外があったのかという問題も興味深いし、山田1892以降のアクセント資料の慎重な検討も必要であろう。

1.2 式反転の規則性の発見にはアクセント式の発見が必要

アクセントの「式」と「型」の区別は、佐久間(1919)に基づくものようで、現代でもいちおう引き継がれているが¹²、「式」を重視せずに、アクセント形式の分類をすべて「型」で済ましてしまうひとたちもいる。佐久間(1919)がアクセントの「型」ではなく、「式」を設定したのは、式保存という言語現象を扱うために必須の概念だからである。式反転も式保存のやや特殊な一形式であると筆者は考えているので、「型」ではない「式」の区別が式反転の規則性の前提である。アクセントの「型」は「式」よりも古くから使われ、アクセント形式なら何でも「型」として捉えられ、「頭高型」「中高型」「尾高型」や「下型」「上型」「下中中型」「上下中型」などになるが、このような細かいアクセント形式の違いが、同系の語のあいだやその他の保存関係にある形式間で保存されるわけではない。「平板型」以外のアクセントを「起伏式」とまとめ、「平板式」と対立させ、アクセントの種類を二大別することにより、見えてくる東京語(共通語)

¹² 平山(1957)は、詳細な日本語音調研究史も含んだ大著であるが、方言研究には「式」と「型」の区別が有効ではなかったということだろうか、説明にはアクセントの「型」しか使わず、「起伏式」という術語は使っていない。平山(1960 : 910)でも「動詞(連用形) + 動詞」の複合動詞の規則を記述しているが、式反転規則としてではなく、アクセントの型だけを使って記述している(本論1.2参照)。

のアクセントの傾向があるというのが佐久間（1919）の考え方である。「平板式」の方は、「平板型」以外のアクセントを「平板式」にまとめているわけではないため、「式」と「型」の区別が分かりにくくなってしまいが、「平板型」と言うときは、必ずしも「起伏式」とだけ対立するわけではなく、「頭高型」や「尾高型」とも対立するだろうから、これは佐久間（1919）の「式」の考え方とは相いれないだろう。アクセントの「式」というときには、アクセントの型を2つにまとめることが前提である。佐久間（1919：216）は「動詞の派生におけるアクセントの保存」について「ある動詞から出た派生動詞もとの動詞との間に式保存が行はれてゐる」と述べ、次の例を含む派生動詞をあげている。

【平板式】 知る—知れる—知らせる、続く—続ける、とまる—とめる、向く—向ふ—向ける、聞く—聞える—聞かせる

【起伏式】 切る—切れる、見る—見える—見せる、剥ぐ—はげる—はがす、出来る—でかす、まじる—まぜる—まざる

「式」を正しく理解するには、アクセントの式が保存されても型は保存されないケースを考えてみればよいだろう。上で「起伏式」とされている「切る—切れる」を例に説明すると、アクセントはキル①とキレル②なので、この二つの派生関係の語において頭高型アクセントは保存されていない。保存関係にあるのはあくまでも起伏式アクセントである。同様のアクセントの保存関係は、動詞や形容詞からの派生名詞にも基本的に存在する。起伏式形容詞の「熱い・暑い」ならアツイ②に対応するのは起伏式名詞のアツサ①である。平板式形容詞「厚い」のアツイ①ならアツサ①が対応し、アツイ②とアツサ①の両者に保存されているのは起伏式アクセントということであり、中高型アクセントや頭高型アクセントが保存されているわけではないことに注意する必要がある。この種のアクセントの保存関係を説明し、また、これが日本語のアクセントの重要な特徴と見る立場がアクセント式という考え方だったのであろう。

佐久間（1917）や文部省普通学務局（1918）¹³でも日本語のアクセントについて基本的なことがらをまとめているが、アクセントの型については述べているが、アクセントの式にはまだ触れていない。文部省普通学務局（1918）では、そのため、「もとの単語のアクセントの型」は変わるが「平板なアクセントの傾向」

¹³ 凡例に「本書の編述は国語調査主任保科孝一、国語調査嘱託安藤正次、同東條操、同神保格、同佐久間鼎の担当したものである」と書かれている。

や「起伏するアクセントの傾向」が保存されることが多いと述べている。ややあいまいな書き方になってしまうのは「式」を導入する前だったのでやむを得ないところだろう。この部分の執筆担当は佐久間だった可能性もあるが、佐久間がアクセントの式を導入し、型と式を明確に分けて考えるようになったのは¹⁴佐久間(1919)からなので、こういう書き方になったようである。佐久間(1919)には、どういうわけか、佐久間(1917)の内容をまとめなおしたものをそっくり付録として再録しているが、「アクセント式」についての説明を挿入し、わざわざ部分的に書き直しをほどこし、巻頭の例言のところ、「本書では、更にアクセントと品詞との関係及びアクセントの保存に関する新知見を加へた。従って先著の読者は、本書において更に進んだアクセントの理解に達することができる」と書いている。なお、佐久間(1929)では、方言間を比較する場合もアクセントの「型」と「式」の区別が便利で必要だと考えていたようで、方言間で「アクセントの型はちがつてゐてもアクセントの式が一致してゐるやうなものが多いこと」を期待していたようであるが、期待通りの研究の進展にはならなかったようで、方言を対象に研究するひとたちは、「型」と「式」の区別を受け入れないで¹⁵、すべてアクセントの「型」で押し通すひとが少なくないようだ(松森・新田・木部・中井 2012、注の9も参照)。「頭高型」「中高型」「尾高型」も「起伏型」「平板型」と同列にならべて記述している。一方、佐久間自身は佐久間(1959: 81)の時点でも平板式と起伏式の2大別は、「アクセントの型の種類別よりも、一層根本的なものと見るべきで、むしろ日本語のアクセントの本質的なものに迫るてがかりを提供するといふことができる」と述べており、アクセントの「式」が役目を終えた旧式の術語になったとは見なしていない。

なお、佐久間(1929a)を読んでもみると、アクセントの「式」では説明できない現象として、外来語や漢語のアクセントが頭高型アクセントから平板型アクセントへ変化する傾向があることを観察して、「台頭式」と名づけている頭高型アクセントと「平板化」という傾向も日本語のアクセントの重要な傾向として捉えていたようである。また、「平板式」という命名が適当かどうか迷っていたのか、佐久間(1951: 15)では「平板というのは、むしろ平進という方が適当だ」というミヤケ(タケオ)氏の意見にしたがつて、あらためて『平進式』

¹⁴ 複合動詞の式反転アクセントをまとめた三宅(1934: 40-41)は、「国語のアクセント形式における型(かた)と式(しき)といふことは、佐久間博士の創説として長く記念されなければならない」と述べている。

¹⁵ 高山(2012: 314)は「ここでいう『式』は古い用語で、平板型・起伏型を当時は平板式・起伏式と呼んだ」とまで書いているようだ。

と『起伏式』との対立を考えたいと思います」のように書いている。

2. 複合動詞の式反転アクセントのNHK2016による現況調査から

複合動詞の式反転アクセントの現況を調査するためには前部動詞が起伏式のものを調べる必要があるが、現在、版を重ねるアクセント辞典に2系統あるが、複合動詞アクセントの現況を調べるにはNHKのものの方が適している。放送用とはいえ、現代の標準語アクセントと言える内容を備えていると考えられるからである。たとえば、NHK2016に生かされたNHKの2009年の音声聴取式の調査では、音声流して、「放送で使うのにふさわしい」アクセントかどうかを判断させていて、この結果をもとに記載アクセントの内容を変更している。一方、三省堂のアクセント辞典では、上のトリダスとニゲダスのアクセント表記でも1958年の初版から2014年の最新版まで表記をまったく変えていない。三省堂のアクセント辞典では、東京の伝統的アクセントを記述することを目指しており、初版以来アクセント表記をあまり変えてきていない。秋永自身は複合動詞の新しいアクセントも論文中では指摘しているが（秋永 1999：10、38-41）、アクセント辞典の編集には、おそらく意図的に、生かしていない。つまり、三省堂のアクセント辞典は伝統を尊重する姿勢があり、新しい言語変化を捉える目的では編集されていないということであろう。

実際のアクセント表記の例で、複合動詞アクセントの現況調査にNHK2016が適していて、秋永2014があまり適していないことを確認しておこう。三省堂とNHKの最新のアクセント辞典だけでなく、三省堂の『新明解国語辞典』の初版（1972）と4版（1989）のアクセントも出しておく。ミサダメルのアクセントである。なお、『新明解国語辞典』のアクセント表記は、金田一春彦担当だったが、4版から柴田武担当に変わっている。

ミサダメル（見定める）のアクセント

(ア) 金田一1972	①	(ウ) 秋永2014	④④
(イ) 柴田1989	④⑤①	(エ) NHK2016	④①

出版年順だが、式反転アクセントの平板式アクセントが（ア）だけでなく、（イ）を飛ばして、（ウ）でも優勢になっている。（イ）ですでに起伏式アクセントが先行しているにもかかわらず、（ウ）では起伏化が後退して、平板式優勢である。実は、秋永1958が①（新は④）としていたので、50年以上あとに出版された（ウ）の秋永2014は記載内容をほとんど変えていない。一方、（イ）の柴田1989

は『新明解国語辞典』4版であるが、最初に起伏式の④や⑤が来ているが、必ずしも優勢という意味ではないらしく、解説には「若い層の型ほど先に示してある」とされ、「二十年もたないうちに日本の社会の中核になるはずの人々のアクセントだからである」と理由が書かれている。なお、柴田1989の尾高型アクセントは独特であるが、終止形アクセントにこだわりをもって、「引用の『と』に続く場合を考え、『～ということ（もの）は』のアクセントから抽出した」ためである。「と」の前には、以前には見られなかったことのようにだが、アクセントの下がり目が挿入される場合が増えてきていて、そのため、柴田1989の抽出した終止形のアクセントは他のアクセント辞典には見られない、尾高型の動詞のアクセントがかなり混じることになったようだ。

さて、複合動詞の式反転アクセントの現況調査の集計では、NHK2016に収録の複合動詞を調べ、前部動詞が起伏式のもののアクセントを調査したが、複合動詞の収集方法についても述べておくのが適当だろう。先行研究の相澤（1992）や姫野（1999）や秋永・坂本（2010）の複合動詞のリストを参考にして、主なものは漏れがないように注意しながら、書籍版しか販売されていないNHK2016を手作業で調べて、複合動詞のアクセントの記録をとった。個人的な作業の結果なので、たぶん、調査した複合動詞には漏れがあるだろう。しかし、先行研究のリストの複合動詞も不一致がかなりあったので、完全なリストはあり得ないということを知ることができたし、大体の傾向をつかむためには収録語彙の完全な調査は必ずしも必要ではないだろう。したがって、最終的には、1033語の複合動詞の集計をとることになったが、NHK2016に収録されている前部動詞が起伏式の複合動詞の大半であろうが、すべてではないことを断言しておきたい。また、個人の作業なので、アクセントの記録ミスなども修正しきれていないものが多少は残っているだろうことも、あらかじめ、謝罪しておきたい。

2.1 調査対象の複合動詞について

前部動詞と後部動詞からできている複合動詞で、式反転アクセントが明治期から大きく変わってきているのは、前部動詞が起伏式アクセントの場合であり、本稿でのNHK2016の調査はこれを対象にしている。前部動詞が平板式の複合動詞は、複合動詞が起伏式アクセントを取り、アクセントは安定している。ウリダスやヒキダスのアクセントはアクセント核を3拍めにとるが、それは山田1892からNHK2016まで変わっていない。

ウリダス（４拍語、前部平板式）

- ③ …… 山田1892、神常1932、NHK1943、NHK1951、秋永1958、平山1960、NHK1966、金田一1972、秋永1981、NHK1985、柴田1989、NHK1998、秋永2001、秋永2014、NHK2016

ヒキダス（４拍語、前部平板式）

- ③ …… 山田1892、神常1932、NHK1943、金田一1943、NHK1951、秋永1958、平山1960、NHK1966、金田一1972、NHK1985、柴田1989、NHK1998、秋永2001、秋永2014、NHK2016

一方、前部動詞が起伏式のトリダスやニゲダスの場合、式反転アクセントの平板式が古いアクセントであるが、現代にかけて、起伏化へと変化してきており、辞典の記載アクセントは容認するアクセントやどちらを推奨アクセントとするかという違いで、かなり複雑である。

トリダス（４拍語、前部起伏式） ……（ア）→（イ）→（ウ）→（エ）

- （ア） ①（神常1932、NHK1943、金田一1943、NHK1951、金田一1972）
（イ） ①③（秋永1958、平山1960、NHK1966、秋永1981、NHK1985、秋永2001、秋永2014）
（ウ） ③④①（柴田1989）
（エ） ③①（NHK1998、NHK2016）

ニゲダス（４拍語、前部起伏式） ……（オ）→（カ）→（キ）→（ク）

- （オ） ①（神常1932、NHK1943、NHK1951、金田一1972）
（カ） ①③（秋永1958、平山1960、NHK1966、秋永1981、NHK1985、秋永2001、秋永2014）
（キ） ④①③（柴田1989）
（ク） ③①（NHK1998、NHK2016）

したがって、複合動詞の式反転アクセントが明治期以降現代までのあいだにどのような変遷をたどったか調べるなら、前部動詞が起伏式のものについて調べる必要があるが、前部動詞が平板式のを調べる意味はほとんどないことになる。

さて、調査したのは、NHK2016で前部動詞が起伏式の複合動詞だが、前部動

詞のアクセントが平板式と起伏式でゆれているものは対象外として¹⁶、起伏式アクセントのみをとる複合動詞に限った。たとえば、シメス②①、ショゲル②①、タドル②①、ヌグウ②①、ユラグ①②、キシム②①、タワム②①などは、現在、起伏式と平板式でゆれている。また、複合動詞風のものや一部古語が残存しているものなど、現代日本語として前部動詞と後部動詞に分析できないものは除外した。判断にあたっては、漢字表記も重視し、一字の漢字で書かれるようになっているもの（承る、貢ぐ、陥る、陥れる）¹⁷も除外した。現代日本語というところが多少あいまいで、イガミアウ、イテツク、コキオロス、コキツカウ、トリヒシグ、ノメリコム、セメギアウ（単独で使えるかどうか問題にしている動詞に下線を付した）のように境界線上にあるものもある。NHK2016にイガム、イテル、コク、ヒシグ、ノメル、セメグのアクセントが掲載されていることを確認したうえで調査対象としたが、現代日本語で頻度の高い動詞とは言えないだろう。一方、前部動詞と後部動詞の複合動詞とは認めなかったのは次のような例である。いずれも単独動詞としてはNHK2016に掲載されていない動詞を含んでいる。

シガミック、デカス、ミイダス、オビキダス、サラケダス、ハミダス、ケトバス、タタキノメス、ウチノメス、ホメソヤス、ケチラス、ブッコロス、ネジコム、メリコム、ナダレコム、オチイル、ハイル、ミツカル、ネジキル、デキル、ニガリキル、ダマリコクル、ズッコケル、オイシゲル、ブチマケル、ネジフセル、キタル、マクシタテル、ハミデル、オチブレル、デッパル（逆引き配列）。

シガミックではシガムという動詞が現代語では消失しているだろうし、ミイダスではイダスが問題であり、オビキダスではオビクという動詞が現代日本語には存在しないと言えるだろう。複合動詞の定義を厳密に考えるかどうかは、先行研究でも様々で、本稿の集計では、前部動詞、後部動詞それぞれのアクセントも調べる関係上、どちらも単独でNHK2016に収録されている動詞でなければならないという制限を付ける必要があった。秋永・坂本（2010）ではゆるやかに複合動詞をとらえているようで、古語由来のものも複合動詞として集計しているので、デキル、デカス、ミイダス、ミツグ、ケコロス、ヒアガル、ヒカラ

¹⁶ ソナエル③②のように起伏式内でゆれているものは除外していない。

¹⁷ 秋永1958（東京語の伝統遵守の傾向の強い三省堂のアクセント辞典の最初の版）では、この四つの動詞について複合動詞の式反転アクセントを推奨アクセントとして記載している。ウケタマワル①⑤、ミツグ①②、オチイル①③、オトシイレル①⑤である。

ビル、ズッコケル、オモンパカル、ワルビレルなども複合動詞として集計されている。相澤（1992）の場合も、単独で動詞として使えないものは除外するとして、フリシキル、ホメソヤス、ミソメル、ミトレルや音便形になっているブッタオレル、カッパラウなども除外したと説明しているが、ハイツクパウ、ハミダス、ネメツケル、ヘシオル、ネジアゲル、ミツカルは含まれている。傾向を探る目的では、細かい違いは問題にならないと思うが、集計の対象とする複合動詞は研究によって異同があることには注意する必要がある。

なお、調査対象には前部動詞が古語形のものや促音便などを起こしているものを念のために除外した。古語形のものについては2.2.4で触れるので、促音便形になっているものについて簡単に述べておく。前部動詞のブツがブツとなる複合動詞は除外しているが、俗語形としてある程度使われている。こういう複合動詞は、語形上、1語性が進んだ状態であるのだろう。ブッタオスと比較用にウチタオスのNHKのアクセント辞典の各版の記載アクセントを示しておこう。ウチタオスは、現在まで式反転アクセントと起伏式アクセントでゆれているが、ブッタオスは起伏化が早く、しかもすでに起伏化が完了していると見なせるようだ。なお、ブッタオスは、平板式はNHK1943だけの記載アクセントではなく、神常1932でも④で記載されている。

ブツ／ウチ	NHK1943	NHK1951	NHK1966	NHK1985	NHK1998	NHK2016
ブッタオス	④	④	④	④	④	④
ウチタオス	未掲載	④④	④④	④④	④④	④④

2.2 式反転アクセントの集計結果から

集計結果はNHK2016に収録の複合動詞のうち前部動詞が起伏式のもの集計をもとにまとめている。NHK2016で平板式優勢な複合動詞と起伏式優勢の複合動詞に分けて、様々な条件で集計している。複合動詞全体の拍数別の集計結果（2.2.1）、前部動詞と後部動詞の拍数別の集計結果（2.2.3）、前部動詞の後部動詞の拍数の組み合わせ（拍構成）の集計結果（2.2.4）、後部動詞のアクセント式別の集計結果（2.2.5）、頻度の高い前部動詞別と後部動詞別の集計結果（2.2.6）である。2.2.2では、平板式優勢ではなく、平板式がアクセント記述に残っているものと平板式が含まれず、起伏式のみとなっている複合動詞に2分した集計結果を示していて、平板式を維持している複合動詞なら現代でもかなり残っていることを示している。

一方、調査対象から除外した複合動詞というわけではなく、NHK2016に収録

されていなかった複合動詞も、下の例のように、かなりあった。詳しく考えることはしないが、ハジメルのように多くの動詞と結びつくような後部動詞との複合動詞や、複合動詞としての意味が単純に前部動詞と後部動詞の総和になるような複合動詞は国語辞典にもアクセント辞典にも収録されにくいと思われる。

コスレアウ、タケリクルウ、アタタメナオス、クサリダス、アブリダス、タオレフス、ノロイコロス、ナグリコロス、ケリコロス、モダエクルシム、アガキクルシム、モガキクルシム、ウメキクルシム、カバイキル、セマリクル、フージコメル、ツキアイハジメル（逆引き配列）。

2.2.1 平板式優勢な複合動詞と起伏式優勢な複合動詞の拍数別割合

アクセント辞典に記載されている唯一のアクセントが平板式、あるいは、第1アクセントが平板式のを平板式優勢とし、そうでないもの、つまり、唯一記載されているアクセントが起伏式か、複数記載されているアクセントの第1アクセントが起伏式のを起伏式優勢として集計した結果が[表1]である。なお、それぞれの割合は、同一拍数の複合動詞の合計に対するものである。

[表1] 平板式が優勢な複合動詞、起伏式が優勢な複合動詞 (語数)

複合動詞 全体の アクセント	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語
平板式優勢	6(46%)	66(30%)	46(8%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
起伏式優勢	7(54%)	151(70%)	520(92%)	205(100%)	31(100%)	1(100%)
計	13(100%)	217(100%)	566(100%)	205(100%)	31(100%)	1(100%)

平板式が優勢な複合動詞は、3拍語から5拍語までしか存在せず、長短を問わず、劣勢である。合計しても118語にしかならず、1033語の11%にしかない。秋永・坂本(2010:74-80)では、秋永2001を対象にした複合動詞の集計結果が示されているが、起伏式前部動詞の複合動詞で、46%が平板式だったとしている。秋永2001とNHK2016のあいだに大きく変化したというより、「複数注記されたアクセントもそれぞれ数え」という集計方法の違いのためと思われる、[表1]の集計結果を細かく見ると、3拍語と4拍語では、46%と30%で、それなりに平板式優勢の割合は高いが、5拍語では8%しかなく、6拍語以上になると、平板式が優勢な複合動詞は存在しなくなる。複合動詞の起伏化を全体の拍数に関連付けた先行研究は多い。秋永・坂本(2010:74)では「起伏式化は

前部成素が起伏式のうち、拍数の多い動詞から」進行していると述べられているし、塩田（2016：88）では「平板型がある程度の勢力を保っているものは平均拍数が少ない」と述べている。複合語であれば起伏式が基本形という考え方もあるが、単純動詞であっても長くなると、起伏化しやすい傾向があり、複合動詞全体の長さによる起伏式動詞の増加も動詞の語長との一般的な関連を考慮することができるだろう。平山（1940）の「東京アクセント語例」では動詞は5拍語までしか掲載していないが、平板式アクセントだった5拍動詞で現代は起伏式に変化しているものや変化しつつある単純動詞を見つけることも次の例のように難しくない。

5拍の単純動詞	平山1940	NHK1943	金田一1943	NHK1951	NHK2016
ウッタエル	①	①	①④	①④	④③
ウナサレル	①	①	①	①	①④
ウナダレル	①	①	①	①④	①④
カコツケル	①	①	①④	①	④①
サマタゲル	①	印刷不鮮明	①④	④①	④
タクワエル	①	④	①④	④	④③
ナグサメル	①	①④	①④	①④	④
ヘコタレル	①	①	①	①	①④
ヘリクダル	①	①	①④	①	④①

しかし、2.2.3以降では前部動詞と後部動詞の拍数や前部と後部の拍数の組み合わせ（拍構成）を調べるが、複合動詞全体の拍数が7拍以上の長大語では起伏化との関連は強いが、それ以下では、前部動詞の拍数がとくに重要であり、後部動詞の拍数はそれほど重要ではないことを述べる。

2.2.2 平板式を維持している複合動詞の拍数別割合

〔表1〕の結果では、式反転アクセントの規則にしたがった平板式アクセントがほとんど残っていないかのような印象を与えるが、複数の記載アクセントに平板式が含まれていれば「平板式維持」として、平板式を維持している複合動詞の割合と起伏式のみ記載しかない複合動詞の割合を3拍語から8拍語まで算出したのが〔表2〕である。

[表2] 平板式を維持している複合動詞、起伏式のみ複合動詞 (語数)

複合動詞 全体の アクセント	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語	7拍語	8拍語
平板式維持	12(92%)	205(94%)	457(81%)	113(55%)	2(6%)	0(0%)
起伏式のみ	1(8%)	12(6%)	109(19%)	92(45%)	29(94%)	1(100%)
計	13(100%)	217(100%)	566(100%)	205(100%)	31(100%)	1(100%)

[表2]を見ると、3拍語の92%、4拍語の94%に平板式アクセントが含まれており、全体でも1033語のうち789語の記載アクセント中に平板式アクセントが含まれている。全体の76%であり、式反転アクセントの規則は、依然、消滅しておらず、現存していると言えるだけの状況は保っていると思えることができると思う。「古くは、～規則があったことが分かっている」(松森・新田・木部・中井 2012:176)は複合動詞の式反転アクセントの衰退傾向を誇張しすぎていることになるだろう。[表2]の集計結果では、過去の規則性というには、まだ、強すぎる勢力を保っていると言えるだろう。ところで、秋永・坂本(2010:74)では「前部成素が起伏式の場合は45.5%が平板式」としていて、比較するとはるかに少なくなるのは、調査対象の違いもあるだろうが、第1アクセントと第2アクセントを区別しないし、起伏式アクセントと平板式アクセントの記載語も別々に数え、延べの総語数を出して、延べ語数に対する割合を出しているようなので、それが低めでも高めでもない割合の理由のひとつになっているのだと考えられる。[表2]の結果で平板式維持率に注目すると、3拍語と4拍語では90%以上が平板式を含んだアクセント記述になっているが、5拍語でも81%とまだかなり高く、減少が顕著なのは6拍語からで、55%に減少している。さらに、7拍語ではわずか6%にしか平板式アクセントはアクセント記述に含まれていなかった。2.2.1の[表1]では、6拍語以上で平板式優勢の複合動詞はなかったが、平板式アクセントが複数の記載アクセント中に含まれるものなら(つまり、第2アクセントとして)6拍語の55%にまだ平板式アクセントが記載されていることには注目できるだろう。集計結果を見ると、複合動詞からの転成名詞が平板式であるという規則性と同じように、複合動詞は起伏式アクセント(次末拍にアクセント核、中高型[-2])を持つとまとめることが、外国人向けの日本語教育では、事実上の標準になっていると塩田(2013:255)には紹介されているが、頻度の高い複合動詞の中には、ミツケル、デカケル、オチツクのように式反転アクセントのままに発音される傾向の強い複合動

詞もあるわけだし、現時点の複合動詞のアクセントを次末核型（中高型 [- 2]）と単純化して示すのは、複合動詞のアクセントの起伏化傾向の強調しすぎではないかと思われる。

2.2.3 前部と後部の拍数別に集計した平板式が優勢な複合動詞の割合

複合動詞全体の拍数をもとに集計すると、すでに平板式優勢が優勢な複合動詞の条件を見つけないままになっていた。それでは、前部動詞と後部動詞に分けて、それぞれの拍数をもとに集計するとどうなるだろうか。後部動詞の長さは式反転アクセントの平板式アクセントの維持にそれほど関係しないが、前部動詞の長さは関連が深いことが判明する。まず、式反転アクセントの維持にあまり関与しない後部動詞の拍数別の集計から集計結果を見てみよう。

【表3】 後部動詞の拍数別集計表 (語数)

複合動詞全体のアクセント	後部2拍語	後部3拍語	後部4拍語	後部5拍語
平板式優勢	39(13%)	74(12%)	5(4%)	0(0%)
起伏式優勢	266(87%)	525(88%)	118(96%)	6(100%)
計	305(100%)	599(100%)	123(100%)	6(100%)

【表3】で注目したいのは、後部2拍語と後部3拍語の平板式優勢の割合が13%と12%で差がほとんどないし、後部動詞が短い方が式反転アクセントを維持することにはなっていないことである。つまり、平板式を維持するためには、後部動詞が2拍であるか3拍であるかは重要ではないということになる。しかし、後部4拍語になると平板式割合がかなり低くなってしまっているので、後部動詞が2拍か3拍かは式反転アクセントの維持とは関係ないが、4拍になると、式反転アクセントは維持できにくくなるということになる。

【表4】 前部動詞の拍数別集計表 (語数)

複合動詞全体のアクセント	前部1拍語	前部2拍語	前部3拍語	前部4拍語
平板式優勢	44(59%)	74(10%)	0(0%)	0(0%)
起伏式優勢	30(41%)	635(90%)	230(100%)	20(100%)
計	74(100%)	709(100%)	230(100%)	20(100%)

[表4]の結果を見ると、前部動詞が1拍だと、現在でも、平板式優勢の複合動詞の方が起伏式優勢の複合動詞よりも多く、前部1拍語の59%が平板式優勢になっている。しかし、平板式優勢な複合動詞が出現するのは、前部2拍語までで、3拍語だと皆無である。前部動詞が2拍の場合も10%だから、起伏式の方がはるかに優勢であることも表から読み取れる。つまり、式反転アクセントの平板式を維持し、それが優勢になる条件としては、前部動詞が1拍であることということになるだろう。

2.2.4 前部動詞と後部動詞の拍構成別の集計

前部動詞の拍数と後部動詞の拍数の組み合わせ（これを拍構成と呼ぶことにする）で平板式優勢の複合動詞と起伏式優勢の複合動詞の語数と割合を集計しておこう。[表5]は前部が1拍、後部が2拍の最小構成の拍構成から前部も後部も4拍のアクセント辞典に収録された最大の拍構成の複合動詞まで拍構成別に集計したものである。表にはそれぞれの拍構成内の平板式優勢語と起伏式優勢語の割合も出している。[表5]を見ると、前部が2拍で後部が3拍までしか平板式優勢の複合動詞は存在していない。前部動詞が3拍や4拍なら後部動詞の長さにかかわらず起伏式が優勢になっている。1+3の拍構成では、平板式優勢が69%あり、50%を超えている拍構成は唯一のものである。複合語全体の長さでは同じ2+2では、20%とかなり低くなっている（後述するように1985の『東京語アクセント資料集』の複合動詞では2+2の拍構成でも平板式の割合がかなり高かった）。2.2.3では、前部動詞が1拍だと平板式優勢の傾向が強いことを確認したが、5拍語の様々な拍構成を比較すると、1+4では、平板式優勢は42%で、依然、かなり高いが、起伏式優勢の複合動詞の方が多くなっている。それでも、同じ5拍語の2+3の拍構成の8%よりも平板式優勢の割合がはるかに高くなっていることには注目できるだろう。

[表5] 拍構成別の集計表（語数）

拍構成	平板式優勢	起伏式優勢	計
1+2	6(46%)	7(54%)	13
1+3	33(69%)	15(31%)	48
1+4	5(42%)	7(58%)	12
1+5	0(0%)	1(100%)	1
2+2	33(20%)	136(80%)	169
2+3	41(9%)	402(91%)	443
2+4	0(0%)	92(100%)	92
2+5	0(0%)	5(100%)	5
3+2	0(0%)	112(100%)	112
3+3	0(0%)	100(100%)	100
3+4	0(0%)	18(100%)	18
4+2	0(0%)	11(100%)	11
4+3	0(0%)	8(100%)	8
4+4	0(0%)	1(100%)	1
計	118(11%)	915(89%)	1033

同じ5拍語といっても、拍構成が3 + 2だと平板式優勢の複合動詞は皆無になってしまう。したがって、NHK2016の結果では、(たとえば7拍語以上の)長大語を除けば複合動詞全体の長さはそれほど重要ではなく、前部動詞が短いことが平板式アクセントの維持に重要だということになるだろう。平板式が優勢な複合動詞が多数派の唯一の拍構成は1 + 3であったが、合計33語で、以下の複合動詞が該当している。

デアルク、デカケル、デマワル、ミアゲル、ミアタル、ミオクル、ミオロス、ミカエス、ミカエル、ミカケル、ミカネル、ミクダス、ミサゲル、ミスエル、ミステル、ミスマス、ミツケル、ミツメル、ミツモル、ミトース、ミナオス、ミナラウ、ミナレル、ミノガス、ミノコス、ミハナス、ミハラス、ミホレル、ミマモル、ミマワス、ミマワル、ミヤブル、ミワタス。

前部動詞1拍と2拍のものを比べると、明らかに1拍のものの方が起伏式が優勢である割合が高いようであるが、これは平板式優勢の割合が高い順にソートした〔表6〕を見た方がはっきりするであろう。先頭は前部動詞が1拍のものに占められている。次に2拍の前部動詞の複合動詞が続いている。後部動詞の長さは、短めの方が平板式優勢になる割合が高い点は、2拍と3拍の前部動詞の複合動詞に基本的には共通しているが、前部動詞が1拍の場合は、もっとも平板式優勢の割合が高いのは後部動詞が2拍のものではなく、3拍の複合動詞になっている。拍構成が1 + 2や1 + 4のものは1 + 3に比べて所属する動詞の数が少なめだということも関係しているかもしれない。前部動詞が2拍の場合には所属する動詞も多いし、後部動詞の拍数は3拍よりも2拍と短い方が平板式が優勢になっている。相澤(1992:226)は「語の長さが同じであれば、前部成素に比べて後部成素の長いものほど平板式が保持されやすい」と『東京語アクセント資料集』

〔表6〕 拍構成別の集計表
平板式の割合が多い順 (語数)

拍構成	平板式優勢	起伏式優勢	計
1 + 3	33(69%)	15(31%)	48
1 + 2	6(46%)	7(54%)	13
1 + 4	5(42%)	7(58%)	12
2 + 2	33(20%)	136(80%)	169
2 + 3	41(9%)	402(91%)	443
1 + 5	0(0%)	1(100%)	1
2 + 4	0(0%)	92(100%)	92
2 + 5	0(0%)	5(100%)	5
3 + 2	0(0%)	112(100%)	112
3 + 3	0(0%)	100(100%)	100
3 + 4	0(0%)	18(100%)	18
4 + 2	0(0%)	11(100%)	11
4 + 3	0(0%)	8(100%)	8
4 + 4	0(0%)	1(100%)	1
計	118(11%)	915(89%)	1033

(1985)の結果をまとめているが、このまとめ方だと、前部動詞の長短の重要性にはあまり注目しておらず、後部動詞の長さをもとに記述していることになるため、NHK2016の結果をもとに判断するなら、やや適切さを欠いていると思われる。前部が1拍で後部が5拍の例はミマチガエル(⑤④①)の1例しかなかった¹⁸、前部動詞が1拍であっても後部動詞が5拍以上で起伏式が優勢になるという一般化までは必ずしもできないだろう。反対に、前部動詞が1拍で平板式がアクセント記述に残っていないような起伏式のみ複合動詞は、調査対象の複合動詞に75語の前部1拍の複合動詞があったが、イヌク②(射抜く)とミマガウ③(見まがう)の2語しかなかった。これまでの先行研究の多くは、平板式アクセントの維持より衰退に着目しているためか、前部動詞が1拍の複合動詞に着目した考察は行っていないと感じていたが、この傾向は、かつてはそれほど明瞭ではなかったようである。相澤(1992)と同じように『東京語アクセント資料』を利用して菅野(1989:20)が平板式残存率(算出方法の詳細は不明)を出しているが、これは、[表6]のようにきれいに前部動詞が1拍なら強い式反転アクセントの維持傾向、次に続くのが2拍の前部動詞というような傾向は示していなかったようである。NHK2016の平板式優勢の複合動詞の割合の集計結果と合わせて、菅野(1989)の算出した割合の高い順に拍構成をソートした対比データとして示しておきたい。『東京語アクセント資料』のデータは、東京語1985として略しているが、今後、略記することにする。現代にかけてのアクセントの変化も読み取れるものと思われる。

拍構成	東京語1985	NHK2016	拍構成	東京語1985	NHK2016
1+3	55.8%	68.8%	3+4	18.1%	0.0%
2+2	43.2%	19.5%	3+2	16.1%	0.0%
1+4	39.8%	41.7%	2+5	15.7%	0.0%
1+2	34.3%	46.2%	3+3	14.1%	0.0%
2+3	33.9%	9.3%	4+2	9.5%	0.0%
2+4	32.7%	0.0%	4+3	6.9%	0.0%

1+3の拍構成がもっとも式反転アクセントを維持していることは、NHK2016のデータと違いがないが、一般に前部動詞が1拍なら2拍に比べて平板式が優勢だったとは東京語1985では言えない。つまり、式反転アクセントの維持条件

¹⁸ 念のためにNHKのアクセント辞典の各版のアクセントを調べてみた。1966年版からの採用で、①⑤(1966)→①⑤(1985)→⑤④①(1998)→⑤④①(2016)。

としての前部1拍という音韻条件は、式反転アクセントの衰退が進んだNHK2016の段階できれいに現れるようになった特徴ということになりそうである。また、東京語1985では前部動詞が3拍以上でも平板式残存率があるし、6拍語であっても、2+4なら32.7%と高い残存率ということになるが、NHK2016では平板式優勢な複合動詞は前部動詞が3拍以上でも、6拍語でも、どちらの場合も皆無だった。つまり、語長の長い複合動詞から起伏化が進み、前部動詞が2拍のものでも大きく起伏化が進み¹⁹、前部動詞が3拍以上では、起伏化が完了してしまったことを示しているだろう。東京語1985とNHK2016では、拍構成が2+2のものでかなりアクセントが変わってしまったものがあるはずなので、調べてみた。相澤（1992）の末尾の別表²⁰から、前部2拍の複合動詞で、平板式の支持者数が起伏式の支持者数の1.5倍以上2.3倍までのものを取り出し²¹（この中に2+3のトリオコナウやトリマトメルは入らなかったし、2.3倍を超える複合動詞は、オチツク、トリカエル、モチアゲルなど、NHK2016では例外なく平板式を維持していた）、NHK2016の記載アクセントと対照した。NHK2016で平板式アクセントを第1アクセントとしていて、式反転アクセントを維持している複合動詞には網掛けをかけてある。半数程度は第1アクセントとして平板式を維持しているが、逆に言えば、半数程度が起伏式を第1アクセントとするように変化してしまっている。しかも、拍構成が2+2か2+3かということは、関係がないようで、どちらからも平板式アクセントが変化したものと維持したものが出ているようである。NHK2016は東京語の資料でもなく、性質もことな

¹⁹ 前部動詞が2拍のものでは以前はそれほど起伏化が進んでいなかったことは、菅野・白田・最上・宗像（1982：279-283）のNHKアナウンサー調査の結果を見ても分かるだろう。前部起伏式の複合動詞で式反転アクセントの平板式を維持している複合動詞について単純に前部1拍とはできず、「今後、これらの語に起伏型が増えていくと考えることも難しく」、「起伏型に変化していく傾向が弱い」複合動詞としてウケトル、カキコム、ミコム、デナオス、ミカエス、ミアゲルの6語をあげている。このうち、前部2拍のウケトルとカキコムは、NHK2016ではウケトル④③とカキコム③④であり、ウケトルの変化はあいまいだが、カキコムは明らかに起伏化を強めたことになる。つまり、アクセント変化の途中経過段階では、必ずしも分かりやすい傾向を示すわけではなく、語によっては、変化の終了後でもなければ捉えきれない傾向もありそうである。

²⁰ 東京語1985は19人の被調査者のアクセント資料（複数のアクセントを認めてもいい）になっているが、相澤（1992）の888語の複合動詞のリストは、平板式と起伏式のうち平板式支持者が多い順に複合動詞を並べ、平板式支持者と起伏式支持者が同数の場合は起伏式支持者が少ない順に並べている。

²¹ 相澤（1992）の複合動詞のリストにはタチガレルが入っていて、平板式支持者数が16で起伏式支持者数が9で、1.8倍ということになるが、複合動詞としてはNHK2016には採録されていないので、リストから除外した。タチガレルは名詞形のタチガレが先行して辞典類に収録されているので、連濁している複合動詞ということもあるが、名詞由来の動詞と見るべき、やや特殊な複合動詞の可能性が高い。

るアクセント資料であるが、前部動詞が2拍の複合動詞からは、1985年以降に起伏化を強めた動詞が多数あることは推定できるだろう。

前部2拍の複合動詞	拍構成	平板式支持 (a)	起伏式支持 (b)	比率 (a/b)	NHK 2016	前部2拍の複合動詞	拍構成	平板式支持 (a)	起伏式支持 (b)	比率 (a/b)	NHK 2016
ウケモツ	2+2	14	6	2.3	③①	タテコム	2+2	16	9	1.8	③①
ウチアケル	2+3	16	7	2.3	④①	カケダス	2+2	15	9	1.7	③①
ツメヨル	2+2	16	7	2.3	①③	タテカエル	2+3	15	9	1.7	①④③
ウケトル	2+2	15	7	2.1	①③	トリアゲル	2+3	13	8	1.6	①④
サシコム	2+2	15	7	2.1	①③	カチコス	2+2	13	8	1.6	③①
カキマワス	2+3	15	7	2.1	④①	タチヨル	2+2	13	8	1.6	①③
タチムカウ	2+3	15	7	2.1	①④	トリアメル	2+3	13	8	1.6	①④
ノミコム	2+2	15	7	2.1	③①	マチワビル	2+3	13	8	1.6	①④
ニゲダス	2+2	16	8	2.0	③①	タチサル	2+2	16	10	1.6	③①
コゲツク	2+2	14	7	2.0	①③	ヒエコム	2+2	16	10	1.6	③①
ツケネラウ	2+3	14	7	2.0	④①	カケコム	2+2	14	9	1.6	③①
モチアガル	2+3	14	7	2.0	①④	トリッグ	2+2	15	10	1.5	③①
トリカコム	2+3	15	8	1.9	①④	デキアガル	2+3	12	8	1.5	①④
イテツク	2+2	13	7	1.9	①③	トリハズス	2+3	12	8	1.5	④①
トリハコブ	2+3	13	7	1.9	①④						

個別動詞の結果に目を向けると、NHK2016で起伏式に変化したウケモツ、ウチアケル、カキマワス、ノミコム、ニゲダス²²、ツケネラウは、東京語1985では、平板式支持者が起伏式支持者の2倍以上あったので、かつてはかなり平板式の傾向が強かったことになるが、それでもNHK2016では、起伏式優勢のアクセント記載に変わってしまっていることになる²³。ただ、比率の低い方の複合動詞もNHK2016でさらに起伏化が進んだということはなく、他の複合動詞と同じ③①のままであることにも注目したい。2+2や2+3の拍構成では、いまだ、起伏化が完了する状態にはなっていないと見ることもできるかもしれない。

なお、NHK2016の集計対象には1拍の前部動詞をとる複合動詞は74語あったが、前部動詞は「見る」「出る」「射る」「来る」の4種類しかなかった。しかも、

²² ニゲダスがこれまでのアクセント辞典の各版でどのように記載されてきたかは2.1に出してある。

²³ NHK2016の内容は必ずしも東京語を追及したものではなく、東京語としてのアクセントが変わったとは必ずしも言えないだろう。放送分野の共通語としてのアクセントが東京語よりも先進的に変化したという可能性もあるからだ。

「出る」と「見る」を前部動詞とするものがほとんどで、それに「射抜く」や「射殺す」の「射る」と「来あわせる」の「来る」が加わるだけである。しかし、不相当として集計対象から除外した動詞の中にも1拍のものがあり、ここで確認した複合動詞のアクセントの傾向を確認することができる。ケトバスのケは古語の活用が残っているもので、現代日本語のケルなら連用形はケリでなければならない。複合動詞のような語形に古語形や現代語では意味のとれない語形が前部か後部に含まれている動詞は意外に多い(2.1参照)。ネジキルのネジ、タタキノメスのノメス、ホメソヤスのソヤス、ダマリコクルのコクル、ミツカル²⁴のツカルなどかなり存在している。しかし、このような動詞も複合動詞のアクセントをもっていて、式反転アクセントの適用範囲に入っているようである。ケトバスはNHK2016で①③とされ、式反転の平板式優勢を維持していることから分かる。ケリトバスは辞典に記載がなかったので、比較できないが、この種の複合動詞は、ケアゲルとケリアゲル、ケカエスとケリカエスのように、古語由来形と現代語形では拍構成が異なることになる。1+3と2+3では拍構成が変わり、現代語形では、式反転アクセントが維持できる条件ではなくなってしまうはずであるが、実際、アクセント辞典の内容では差が出る事が確認できる。前部が1拍のケアゲルとケカエスは平板式が優勢か、劣勢でも平板式を残しているが、現代語形は前部動詞が2拍になり、平板式が辞書の記載アクセントから消えてしまっている。

(ア)	a.	古語由来形	ケアゲル	1拍+3拍	③①
	b.	現代語形	ケリアゲル	2拍+3拍	④
(イ)	a.	古語由来形	ケカエス	1拍+3拍	①③②
	b.	現代語形	ケリカエス	2拍+3拍	③

2.2.5 後部動詞のアクセント式別集計と後部動詞のアクセント式からの影響

複合動詞の式反転アクセントの衰退傾向の中で、平板式を維持しているものに注目すると、後部動詞が平板式のものが多いように思われる。それで、後部動詞のアクセント式別に集計したのが[表7]であるが、強い影

²⁴ 相澤(1992)ではミツケルが複合動詞のリストにない一方で、ミツケルの対語のミツカルは、後部動詞について説明もつけずに、調査対象に含めている。しかし、ツカルという動詞は漬物の場合以外に認めることはできないだろう。「見つかる」という言い方は「見つける」よりも新しく、「見つける」をもとに自動詞形が作られたものと思われる。したがって、「見る」と「付かる」の複合動詞という解釈は妥当性があるとは言えないだろう。なお、ミツケルがリストに入っていないのは、元にした『東京語アクセント資料』(1985)にミツケルが落ちていたせいである。

[表7] 後部アクセント式の影響 (語数)

	後部起伏式	後部平板式	計
平板式優勢	55(8%)	63(17%)	118
起伏式優勢	617(92%)	298(83%)	915
計	672(100%)	361(100%)	1033

響とは言えないと思うが、後部動詞が平板式なら複合動詞が平板式優勢になるものが17%で、後部動詞が起伏式で平板式が優勢なものは8%なのだから、影響はあると考えられる。同様に、後部動詞が起伏式なら全体も起伏式になりやすいと言えるだろう。なお、集計にあたっては、第1アクセントをもとにしたので、アツカウ①③のような後部動詞は平板式として集計されている。菅野(1989:84-91)では『東京語アクセント資料』(馬瀬・佐藤 1985)をもとに複合動詞のアクセントの考察をまとめているが、後部動詞のアクセント式の区別と平板式アクセント残存率を算出していて、後部が起伏式アクセントの場合は29.8%で、後部が平板式アクセントの場合が34.8%とし、「この程度の差では決定的な要因とは言いにくい」と述べている。残存率の算出方法の詳細も不明であるし、資料の性質もことなるが、東京語1985に基づく集計結果に比べて、式反転アクセントの衰退が進んだNHK2016の方が、後部アクセントの式による影響が大きくなっている可能性があるようだ。

次に、式反転アクセントを維持するには、後部動詞のアクセント式だけでなく、語長なども関与している可能性も考え、複合動詞の最多数派の5拍語とその次に多い4拍語に限定して、集計してみた。割合は、平板式優勢の割合を後部起伏式と後部平板式の違いでどのようになるか調べている。[表8]の集計結果を見ると、[表7]との違いも含めて、傾向は変わらないものの、数値はかなり変わるようである。語長や前部や後部の長さによって後部のアクセント式からの影響の強さは変わるものと予想される。4拍語では後部アクセントが平板式なら42%の複合動詞が平板式優勢だが、後部が起伏式だと27%になる。5拍語では平板式優勢な複合動詞は、後部が平板式でも15%に落ち込むが、それでも後部が起伏式の3%と比べればか

[表8] 4拍語と5拍語と後部のアクセント式 (語数)

4拍語	後部起伏式	後部平板式	計
	159	58	217
平板式優勢	42	24	66
	(26%)	(41%)	(30%)
5拍語	後部起伏式	後部平板式	計
	355	211	566
平板式優勢	11	35	46
	(3%)	(17%)	(8%)

なり高い割合だろう。塩田（2013：252）は、NHKが2009年に音声聴取式で実施した放送で使うのに望ましいかどうかをアナウンサーにたずねたアクセント調査では、199語の複合動詞について、後部動詞のアクセント式の影響が認められたのが5拍語と6拍語だったと述べているが、NHK2016の記載アクセントの調査ではそのような限定が必要な結果にはなっていないようである。なお、NHK2016では6拍語では式反転アクセントの平板式が優勢な複合語は存在しない。複合動詞全体の長さ、拍数とは関係なく、後部動詞のアクセント式の影響は受けるが、調査方法と内容によっては影響が見えにくくなる可能性がある。

次に、NHK2016に記載の複合動詞から後部動詞のアクセントが複合動詞のアクセントに影響を与える個別例を幾つか見ておこう。極端な例であるが、1拍

【表9】「出〜」と「見〜」の複合動詞
(後部動詞のアクセント式の影響)

デ/ミ+4拍	全体	後部動詞
デオクレル	①④	①
ミクラベル	①④	①
ミソコナウ	①④	③
ミツクロウ	①④	③
ミトドケル	①④	③
ミアワセル	④①	③
ミオボエル	④①	③
ミキワメル	④①	③
ミサダメル	④①	③
ミハカラウ	④①	③

の「ミ(見)」や「デ(出)」を前部動詞として、後部動詞が4拍の複合動詞を取り出し、全体と後部動詞のアクセントを載せたのが[表9]である。前部1拍なら平板式が残りやすいとはいえ、後部動詞が4拍になると、起伏式が現れやすくなる。後部動詞が平板式のデオクレルとミクラベルは平板式が優勢である。一方、後部動詞が起伏式のものだと、平板式優勢の複合動詞の割合は低くなって、8語の複合動詞のうち、3語のミソコ

ナウ、ミツクロウ、ミトドケルが平板式優勢で、他は起伏式優勢である。つまり、式反転アクセントの平板式が維持されやすいのは、後部動詞が平板式の場合で、反対に起伏化への変化をしやすいのは、後部動詞が起伏式の場合ということになり、後部動詞のアクセントが複合動詞全体のアクセントが一致しやすい傾向が出ている例になっている。起伏式が優勢な複合動詞についてさらに考えると、起伏式が優勢な複合動詞は、例外なく、後部動詞が起伏式という関係も[表9]から読み取れる。平板式がもっとも維持される拍構成の1+3、つまり、前部1拍で、後部3拍の複合動詞でもアクセント辞典で起伏式が優勢になっている複合動詞もちろん存在する。「見る」や「出る」を前部動詞とする動詞から起伏式が優勢になっている複合動詞を取り出してみると、後部動詞は

すべて起伏式の動詞か、一例だけ起伏式が優勢で平板式も使われるミクビルだった。複合動詞／全体アクセント／後部アクセントの順で示すと、デカカル／③①／②、デスギル／③①／②、デソロウ／③①／②、デナオス／③①／②、デハラウ／③①／②、ミアキル／③①／②、ミアワス／③①／②、ミウケル／③①／②、ミオトス／③①／②、ミカギル／③①／②、ミクビル／③①／②①、ミタテル／③①／②、ミヒラク／③①／②、ミマガウ／③／②、ミワケル／③①／②。ミツケルやデカケルのように、後部動詞が起伏式なら必ず起伏式が優勢になるわけではないが、全体が起伏式優勢なら、必ず後部動詞は起伏式か、起伏式が優勢でなければならないということになる。

もう一例、複合動詞の最多数派の前部動詞が2拍、後部動詞が2拍の個別例からも見ておきたい。タス①とダス①を後部動詞にする複合動詞全体のアクセント式の違いに後部動詞のアクセント式の影響が想定できる場合である。

【2拍＋2拍で、起伏式＋平板式と起伏式＋起伏式】

カキタス …… 書き足す …… 起伏式＋平板式 …… ①③

カキダス …… 書き出す …… 起伏式＋起伏式 …… ③①

カキダス …… 掻き出す …… 起伏式＋起伏式 …… ③①

2.2.6 前部動詞別と後部動詞別の集計と特定動詞の傾向

式反転アクセントを維持しやすい個別動詞の傾向を調べておきたい。[表10] は前部動詞について調べたもので、[表11] は後部動詞について調べたものである。どちらも15語以上の複合動詞が存在するものについて式反転アクセントの平板式アクセントが維持されている割合の高いものの順にソートした表になっている。

[表10] 前部動詞別 (15語以上が掲載されているもの)
平板式の割合が高い順 (語数)

前部動詞 (連用形)	平板式優勢	起伏式優勢	計	平板式割合
ミ	40	22	62	65%
モチ	7	11	18	39%
タチ	8	20	28	29%
トリ	10	54	64	16%
ウチ	6	41	47	13%
サシ	4	30	34	12%
カキ	6	59	65	9%
カケ	1	17	18	6%
ヨミ	1	20	21	5%
キリ	0	29	29	0%
オモイ	0	27	27	0%
クイ	0	21	21	0%
モーシ	0	17	17	0%

[表10]には、3拍の前部動詞はオモイとモーシしかないが、どちらも0%で、3拍以上の前部動詞では平板式が優勢になる複合動詞は存在しないことで説明できる。残るのは2拍の前部動詞であるが、平板式優勢の複合動詞の割合がそれほど高くない点では共通しているが、同じ2拍の中でもモチが39%でタチが29%で続いていて、偶然なのか、2拍めがチの前部動詞が高めになっている。同じ2拍の動詞でもキリやクイは0%と著しい差があるが、これについては今のところどのように説明できるのか分からない。前部動詞で使われる「出る」の場合は、合計9語の複合動詞しかなく、表からは除外しているが、平板式優勢がデカケル、デアルク、デマワル、デオクレルの4語、起伏式優勢が5語で、平板式が優勢の割合は44%になる。したがって、ミと並んで式反転アクセントが優勢な割合が高いのがデということになる。

後部動詞別に平板式優勢か起伏式優勢か調べたのが[表11]である。必ずしも2拍の動詞が3拍の動詞よりも式反転アクセントを維持しているわけではないことがこの表の上位の動詞を見ても分かる。同じ2拍の動詞でも平板式割合が32%のツク、20%のコムと0%のダス、アウ、キル、トルでは差が大きい。コム自体のアクセントは起伏式なので、2.2.5で見たような後部動詞のアクセントが平板式で式反転アクセントの平板式が維持されやすいということはあてはまらない。他のダス、アウ、キル、トルと比べて平板式アクセントを比較的保っているコムについては説明できないが、ツクを後部動詞とする複合動詞が式反転アクセントの平板式を維持しているのは、母音無声化した拍にはアクセント核を置きにくく、起伏化しにくいためであるというのが

[表11] 後部動詞別 (15語以上が掲載されているもの)
平板式の割合が高い順 (語数)

後部動詞	平板式優勢	起伏式優勢	計	平板式割合
ツク	6	13	19	32%
アガル	4	12	16	25%
コム	13	51	64	20%
カエル	4	20	24	17%
アゲル	5	28	33	15%
ナオス	2	14	16	13%
ツケル	3	29	32	9%
カエス	1	14	15	7%
トル	1	16	17	6%
ヌク	1	18	19	5%
ダス	0	45	45	0%
アウ	0	33	33	0%
キル	0	23	23	0%
アワセル	0	21	21	0%

筆者の考えである。詳しく説明しよう。複合動詞が起伏化する場合、動詞のアクセントは選択肢が限られていて、基本的には最後から2拍めにアクセント核をもつことになる。したがって、ツクを後部動詞にとる複合動詞が起伏式アクセントをとるなら次末拍のツがアクセント核になるが、前後を無声子音に囲まれた狭母音なので、母音無声化の条件を満たすことになる。無声化母音がアクセントを持ちにくかったことがツクを後部動詞とする複合動詞にもあてはまり、無声化母音がアクセントをもたないようにするため、平板式アクセントが維持されたものと考えられる。

前部動詞が平板式で、後部動詞にツクが使われる複合動詞についても考えてみよう。式反転アクセントの規則では、前部が平板式動詞の場合は起伏式動詞となり、規則に従えば後部動詞のツクのツがアクセント核を持ったはずだが、そのような複合動詞は使われにくい特徴があったようだ。アクセント核の位置がずれ、特殊なアクセントをとったことが観察できる。NHK2016では、イキツク③/ユキツク③とオイツク③で式反転アクセントの規則通りのアクセントであるが、過去のアクセント辞典などを調べてみると、単純に③とはならなかったようである。

【行きつく】

山田1892	全平
神常1932	③
NHK1943	④
金田一1943	③④

【追いつく】

山田1892	未収録
神常1932	③
NHK1943	④
金田一1943	③④

神常1932では、現代と同じ③のアクセントとしているが、他はことなる。山田1892の解釈では「行きつく」が「全平」なので、平板式と解釈している。NHK1943や金田一1943が④としているのは、動詞のアクセントとしては珍しい尾高型アクセントと解釈していることになる。動詞の尾高型か平板型(式)との違いは、テ形やタ形のアクセントの違いとして出ただろうが²⁵、そこまでは山田1892もNHK1943も金田一1943も掲載していないので確認できない。

前部が動詞ではなく、オノマトペの複合動詞でも、ツクが後部動詞になると、複合動詞は起伏化しにくいようである。NHK2016のアクセントはすべて平板式が第1アクセントで、ツクのツにアクセント核をおく起伏式アクセントは、第

²⁵ 神常1932はツク②としているが、ツイテ①も並べ、尾高型動詞のツクがツイテでは頭高型アクセントになることを記載している。

2アクセントとしては見られる場合があるが、第1アクセントになっているものはない。秋永・坂本（2010：80-81）によると、この種の動詞を「活写語」として秋永2001の掲載語のアクセントを式別に集計し、平板式が9例、起伏式が18例としていて、本来、起伏式の方が優勢であるが、～ツクの場合は、例外的に平板式が優勢になるものと考えられる。無声化母音にアクセント核を置くことが現代でも避けられる傾向があるものと解釈できる例であろう。

【2拍のオノマトペの語基+ツク】

ウロツク (①)、ガタツク (①)、ギラツク (①③)、グラツク (①)、ゴワツク (①③)、ザラツク (①)、ダブツク (①)、チラツク (①③)、ネバツク (①③)、バタツク (①③)、ビクツク (①③)、フラツク (①)、ブラツク (①)、ベトツク (①)、マゴツク (①③)、ムカツク (①)。

ツクを後部動詞とする複合動詞は前部がオノマトペであっても起伏化しにくいことを確認したが、起伏式前部動詞をもつ複合動詞のアクセントの経年変化を調べても、他の後部動詞にくらべてツクを後部動詞とする複合動詞が起伏化しにくく、逆に他の複合動詞が起伏化への変化を被りやすかったことが確認できる。やはり、母音無声化拍にアクセント核を置くことを避ける傾向と解釈できる現象と解釈できるだろう。ツクを後部動詞とする複合動詞と、他の後部動詞をとる複合動詞を同一の前部動詞の複合動詞でアクセントの経年変化をNHKの各版のアクセント辞典で調べたのが下にあげておこう。

～ツクと 他の複合動詞	NHK1943	NHK1951	NHK1966	NHK1985	NHK1998	NHK2016
オチツク	①	①	①	①	①	①
オチアウ	①	①	①③	①③	③①	③①
オチコム	①	①	①③	①③	①③	①③
カミツク	①	①	①③	①③	①③	①③
カミアウ	①	①	①③	①③	③①	③①
カミキル	①	①	①③	①③	③①	③①
カミワル	①	①	①③	①③	①③	③①
クイツク	①	①	①③	①③	③①	③①
クイイル	①	①③	①③	①③	③①	③①
クイキル	①	①③	①③	①③	③①	③①
クイコム	①	①③	①③	①③	③①	③①

オチツクは現在まで平板式を保っているが、オチアウは起伏式優勢に変化している。カミツクの場合も現在でも平板式の優勢を保っているが、カミアウやカミキルは起伏化が優勢に変化している。クイツクでは他の複合動詞と同じように起伏式優勢に変わってしまっているが、NHK1951では、クイツクだけがまだ平板式を保っていたことが分かる。このような調べ方でもツクが起伏化しにくかったことが確認できる。オチコムも現在でも平板式が優勢であるが、これは、[表10] で見たように、コムも比較的平板式を保つ傾向があることと関係がありそうである。

[表10] と [表11] の上位の動詞は、ツクのように母音無声化拍にアクセント核を置きにくい傾向から説明できるものは例外的で、なぜ平板式を維持する傾向が強いのかうまく説明できないものがほとんどである。しかし、前部動詞の表の上位の動詞と後部動詞の表の上位の動詞を組み合わせると、やはり、平板式が優勢になる傾向を維持しているようである。したがって、リストが示す傾向は、説明は完全には付かなくても²⁶、それなりに明瞭な傾向を示しているということになるだろう。[表10] の上位のミ、モチ、タチ、トリと [表11] からツク、コム、アガルをくみあわせると²⁷、次の複合動詞が存在したが、すべて、NHK2016の時点でなお平板式優勢を維持していた。

(ア) タチアガル	④④	(エ) ミコム	①②
(イ) トリコム	③③	(オ) モチコム	③③
(ウ) トリツク	③③		

3. 式反転アクセントの維持と前部動詞の長さ（拍数）

式反転アクセントの維持されにくくなるのは、全体の拍数に注目を置く先行研究が多いようだが、2.2.4で述べたように、NHK2016の時点のデータを見ると、決定的に重要なのは前部動詞の拍数になっていた。前部動詞が1拍だと式反転アクセントは維持される場合がかなりあるが、2拍になると、維持されにくくなり、前部動詞が3拍で今でも式反転アクセントが優勢な複合動詞は存在していない。そこで、ここでは、前部動詞の長さとして式反転アクセント規則について、あらためて、詳しく考えてみることにしたい。

²⁶ アガルは後部動詞のアクセント式が平板式なので、これの影響が考えられるので（2.2.5参照）、アガルとツク（本文参照）は、後部動詞から説明が可能な場合である。

²⁷ [表11] で4位のカエルは、「帰る」「返る」と「変える」「替える」が混交しており、これらの動詞の二様のアクセントを区別して集計していない。慎重な判断が必要なので、ここでは除外した。

[表12] は、これまでの集計方法とは変え、複合動詞のアクセントに平板式アクセントの記載がなく、起伏

[表12] 部位別・拍数別の起伏式単独アクセントの割合

	1拍	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍	7拍
前部	3%	9%	70%	100%	—	—	—
後部	—	33%	18%	25%	83%	—	—
全体	—	—	8%	6%	19%	45%	94%

式アクセントだけになっているものの割合を部位別（前部、後部、全体）と拍数別に計算してみたものである。前部動詞の拍数なら、1拍なら3%が起伏式アクセントのみのアクセントになっており、2拍、3拍、4拍で、9%、70%、100%と変化している。なお、8拍語でNHK2016の記載アクセントが起伏式のみになっている語はカンガエアワセル⑦1語しかなかったの、表からは除外した。前部動詞が4拍だと、NHK2016の記載アクセントは100%起伏式のみになっている。平板式アクセントが記載アクセントに含まれる複合動詞は存在しなかった。合計20の複合動詞は、イロメキタツ (⑤)、オトロエハテル (⑥)、カンガエアワセル (⑦)、カンガエコム (⑤)、カンガエダス (⑤)、カンガエツク (⑤)、カンガエナオス (⑥)、サマヨイアルク (⑥)、ツラヌキトース (⑤)、ヒッカキマワス (⑥)、ヒッパリアウ (⑤)、ヒッパリアゲル (⑥)、ヒッパリコム (⑤)、ヒッパリダス (⑤)、ヒッパリマワス (⑥)、ホームリサル (⑤)、ホジクリダス (⑤③)、マツワリック (⑤)、ミチビキダス (⑤)、ヨロコビイサム (⑥③) である。さて、これらの前部4拍の複合動詞は過去には式反転アクセントの平板式だったのだろうか。あるいは前部起伏式1語アクセントだったのだろうか。前部4拍の複合動詞になると、資料が少なく、確定的なことは言えないが、平板式の例もあったが、それほど多くなかった可能性が高い。塩田 (2014) は、三宅武郎が編纂主任のNHK1943は実態より規則に忠実なアクセントを付与したことを検証しているが、前部4拍の複合動詞については、式反転の平板式アクセントがそれほど多くなかったようであるし、神常1932ともほとんど違いはなかったようである。山田1892や金田一1943には掲載語はないが、神常1932とNHK1943と寺日1944で調べた結果は以下の通りである²⁸。

²⁸ NHK2016には含まれていない複合動詞だが、神常1932やNHK1943にはコトワリカネル⑥も掲載されている。高橋1904には、アヤシミマドー⑥、イロヅキハジムル⑩、ムラガリイデテ⑤がある。

(ア) オトロエハテル	⑥ (神常1932、NHK1943、寺日1944)
(イ) カンガエコム	⑩ (神常1932、NHK1943、寺日1944)
(ウ) カンガエダス	⑩ (神常1932、NHK1943、寺日1944)
(エ) カンガエツク	⑤ (神常1932)、⑩ (NHK1943)
(オ) ヒッパリアウ	⑩ (神常1932、NHK1943、寺日1944)
(カ) ヒッパリコム	③ (神常1932、NHK1943)

前部起伏式1語アクセントについても補足しておこう。起伏式前部動詞が3拍以上なら複合動詞のアクセントは前部起伏式1語アクセントが基本だったのではないかと述べている先行研究があるが、明確な証拠はないということになる。三宅自身がまとめたらしいNHKの内部資料に「連語動詞のアクセント資料(稿)」があるようだが、そこには「上の動詞がカナ三字以上の起伏式である場合には、場合に依つて(…)二様に言ふ」と書いて、式反転アクセントの平板式アクセントと前部起伏式1語アクセントの例があげられているという報告を塩田(2014:254)でなされている。しかし、上の例では、前部起伏式1語アクセントはヒッパリコムだけである。つまり、NHK1943までのアクセント辞典やアクセントを付与した国語辞典では、4拍の前部動詞なら前部起伏式1語アクセントだったという証拠もほとんど見つからないのである。前部が4拍の複合動詞については、塩田(2014:257)が推定した『「合法則的」でないアクセントの掲載を避ける態度』は、NHK1943においても前部が4拍の複合動詞には認められないことになるだろう。前部動詞の3拍と4拍の差は、これまでの研究では当然同じようなものという思い込みがあったようであるが、そのような思い込みには実態が伴っておらず、実証されないまま現在まで来ているようである。

[表12]の集計結果に戻ろう。後部動詞の拍数や全体の拍数がそれほど重要でないことは起伏式のみ動詞の割合の変化から明らかである。後部動詞が2拍か3拍か4拍かということは起伏化にあまり寄与していない。後部動詞が5拍の複合動詞で起伏式のみになるのは、イキナガラエル(⑥⑤)、ウチタイラゲル(⑥)、カキアラタメル(⑥)、トリカタズケル(⑥)、マチクタビレル(⑥)の5語の7拍語なので、7拍だから起伏式が増えたのか、後部動詞が5拍だから起伏式が増えたのか決定することはできないだろう。唯一平板式を含むものが6拍語のミマチガエル⑤④⑩だった。全体の拍数も6拍以上にならないと大きく増えることはない。複合動詞全体の長さで起伏式のみアクセント記述が大

きく増えるのは、6拍語以上であり、後部動詞の長さなら5拍以上ということになる。前部動詞なら、長さが1拍ふえるごとに起伏式のみ動詞が増えていくことになる。

さて、前部動詞の拍数が長くなると式反転アクセントが使われなくなる明瞭な傾向は、三宅（1934）の時代にもあったものと思われる。アクセント辞典では、前部動詞が4拍のものまでしかなく、しかも、4拍のものも国語辞典やアクセント辞典ではほとんど記載されていないので、式反転アクセントが4拍以上の前部動詞でどの程度支持されるのか調べることは難しい。しかし、敬語の補助動詞として使われる複合動詞なら頻繁に使われるモーシアゲルが存在するので、複合動詞の用法と本動詞の用法でアクセントを比較することができる。「申し上げる」はNHK2016では⑤⑩とアクセントが記載されているが、これは本動詞として使われるもののアクセントではないだろうか。補助動詞として使われる場合では差が出るのではないだろうか。本動詞としての「申し上げる」のアクセントが以前は東京語では平板式だったことは、神常1932、NHK1943だけでなく、大西（1943：81）など、間違いないようである。補助動詞として使われる用法では、言わば前部動詞が長くなったものと解釈できる。神保（1930）の国定読本のアクセント付与では、本動詞としての用法と補助動詞としての用法の両方が出て来るが、異なるアクセントが付与されている。本動詞としてのモオシアゲテ⑩が巻12に3回でてきている。三宅（1943a）の4学年向けのものの国民学校の国定読本にも本動詞のモーシアゲルが2か所に出てくるが、「おいとまを まうしあげて」（p.86）のように、いずれも平板式で記載している。ところが、神保（1930）では、補助動詞として使われるとアクセントが起伏化している。分かち書きは、神保（1930）のものだが、アクセント表記は、棒式のものに数字式に替えている。数字の直前の単位のアクセントを表している。

- (キ) オネガイ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻9)
- (ク) オサッシ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻10)
- (ケ) オクヤミ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻10)
- (コ) オオクリ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻10)
- (サ) オオクリ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻11)
- (シ) オシラセ⑩ モオシアゲ④ ソオロオ③ (巻12)

神保（1930）は「オネガイ⑩ モオシアゲ④」のように分かち書きして、モースの前にアクセント核をもたない動詞連用形やオ+連用形がある場合に分かち

書きしているが、オオクリモースやオネガイモースで1動詞と見なすことができるだろう。しかも、オネガイモースは、単独では、下の記述のように、モースの前に接続する部分が平板化し、モースが起伏式アクセントをもつものとして記載されているので、オネガイモース全体が起伏式アクセントをもつ動詞と解釈できるだろう²⁹。

(ス) コヅツミニテ② オクリ⑩ モオシ① ソオロオ③ (巻11)

(セ) オネガイ⑩ モオス① シダイデ⑩ (巻12)

したがって、オネガイモーシアゲルがオネガイモース（7拍）を前部動詞、アゲル（3拍）を後部動詞とする複合動詞と見なすなら、前部動詞が7拍の複合動詞ということになり、現代の複合動詞の式反転アクセントの状況でも、前部動詞が3拍以上のものに式反転アクセントが優勢のものではなく、4拍以上で式反転アクセントを維持しているものもない状況だったわけであるし、語長が10拍もあれば起伏化する場合であろう。おそらく、前部動詞の長いものや語長の長いものから式反転アクセントが適用できなくなっていったのであろうが、神保（1930）の時代でも前部動詞が7拍もあるような場合には式反転アクセントは適用できず、間違いなく全体が起伏式になっていたことをオネガイモーシアゲルのアクセントが示している。

ただし、神保（1930）の国定読本のアクセント記述の中には、セツニ① イノリ② モオシ① ソオロオ③（巻11）もあり、イノリにもアクセント核があり、モースにもアクセント核があるので、イノリモースという1語というよりは、イノリとモースの2語としてのアクセントを付与していることになるだろう。明治期以前の複合動詞のアクセントについても2語のアクセントを持っていたかどうかも含めて研究の蓄積があり、（吉澤 1952、上野 1989）、明治期以降にも両方の場合があってもおかしくないが、データも少なく、不明な点が多いと言わざるを得ない。

4. 式反転アクセントの衰退が生む混乱と衰退の理由

1. 2で確認したようにアクセントの式は佐久間（1919）で様々なアクセントの保存関係の説明に役に立つとして導入された概念であった。それでは、複合

²⁹ 佐久間（1929a：527）は、「お」が付く動詞について「後に来る制約的な助動詞『なさる・もうす・くださる』などへ接続して『おやすみなさる』、『おいはひもうす』、『おかへりください』などへなるときは、もとよりまた全体として起伏式動詞のやうなアクセントを示すのである」と述べている。

動詞の式反転アクセントの衰退傾向は、式反転アクセントで保存されていたアクセントがきちんと保存されなくなるわけであるが、それでどういうことになっていくだろうか。前部動詞の式反転ということは複合動詞のアクセントが前部動詞のアクセント式を反転させて保存していたことになるが、その規則性が衰退してしまえば、複合動詞のアクセントからは前部動詞のアクセントも後部動詞のアクセントも関連がなくなってしまったということになり、使用頻度の高い複合動詞のアクセントのおかげで比較的使用頻度の低い単純動詞のアクセントが維持されていたような場合は、単純動詞のアクセントが不安定化することが考えられるだろう。そのような例は少なくないのではないかと予想される。

テラシアワセルを平板式で発音していたときには、テラスが起伏式であることを示していたはずである。テラシアワセルを起伏式に発音するようになると、テラスが起伏式なのか、平板式なのか、複合動詞のアクセントからは分からなくなることになる。そうなってしまうと、テラスのアクセントが起伏式から平板式に変化したとしてもおかしくないだろう。テルの方は使用頻度も高い基本動詞で、テラスが平板式で、テルが起伏式だと、これもアクセント式の保存関係を壊すことになるが、現在、こわれている保存関係の同系語の組み合わせがそれなりに見つかるので、将来、ふたたびアクセントの変化を生み出す原因になることも考えられるだろう。テラスとテラスを前部動詞とする複合動詞のアクセントをNHKのこれまでの6代のアクセント辞典で調べた結果を下に出しておこう。

テラスと複合動詞	NHK1943	NHK1951	NHK1966	NHK1985	NHK1998	NHK2016
テラス	②	②	②	②	②①	①②
テラシアワス	①	①⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
テラシアワセル	①	①⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
テラシダス	未掲載	未掲載	未掲載	①	④①	④①
テル（参考）	①	①	①	①	①	①

NHKのアクセント辞典の記載の変遷からは、まず、テラシアワスやテラシアワセルで見られるように、複合動詞のアクセントが変化している。その後NHK1998からテラスも平板式へと揺れ、NHK2016では、起伏式と平板式の順序が逆転している。複合動詞の式反転アクセントの衰退がテラスのアクセント式を崩した³⁰

³⁰ しかし、NHK1943以前にもテラス①を認めるアクセント資料もある。神常1932はテラス①、テル①と記述していたし、神保（1930）でも「ヤミノ① セカイオ① テラス① ヨオ①」（巻12

と解釈できるだろう。一方、テラスの自動詞形であるテルの方は一貫して起伏式のままであり、現在では同系語のアクセント式が分裂することになっている。テラスとテルのアクセント式が不一致するようになったのは、意味用法の分化がアクセント式の保存を解除したという解釈もできるかもしれない。法律にテラシアワセルなどの言い方は、法律がテルとは言えず、意味と用法の対応がないため、アクセントの不一致を可能にしたと解釈できそうである。テルとテラスのように同系語のアクセントでアクセント式が保存されていない例にカスレル①③とカスル②の対もある。一発の弾丸はカスルことはあるが、カスレタ文字のように、やはり、意味用法が分化していて、アクセントの傾向が異なっている例である。

かつて、前部動詞が3拍のもので前部起伏式1語アクセントが見られる複合動詞がかなりあった。現在、前部動詞が2拍でも前部起伏式1語アクセントが観察されるものが幾つかあるが、2拍の前部動詞の複合動詞に対しても式反転アクセントの規則性の支配が弱まったせいではないか。

アクセント式の保存ができなくなる不都合があるにも関わらず複合動詞のアクセントの起伏化の進行が止まらない理由は何だろうか。アクセントの大勢に従うということがまず考えられる理由だろう。動詞や形容詞、とくに複合動詞や複合形容詞の多数派が起伏式なので、それに自然にそろってしまうという説明になる。動詞の基本アクセント自体が起伏式で、終止形なら語末から2番めの拍（これを次末拍と言う）にアクセント核をもつのが基本であるため、複合動詞もその基本形の起伏式へと変化しているとも言えそうだが³¹、そこまで極端な見方まで行かなくても、複合語のアクセント一般の傾向から³²、複合動詞や複合形容詞の多数派が起伏式アクセントであり、起伏式へと変化していると解釈できると思われる。

第9課）とテラス④で記述している。一方、山田1892はテラス②としている。

³¹ 菅野（1989：15）は、現代アクセントの変化の一般的傾向として、「非活用語はアクセントの平板化が多く、活用語はアクセントの起伏化が多い」とまとめている。

³² 平板式と起伏式というアクセント形式の二大別を考え方を導入した佐久間鼎は複合語のアクセントについて、「複合によって出来たものにも、四音節以下のものには平板の型のものが多く、次第に音節の数を増すに従って漸く起伏式昇降的アクセントが多きを占めて来る。そして、その昇降的アクセントを示す語が、ほとんど皆複合語であるといふことは、複合語のアクセントの考察において、まづ注目すべき事柄でなくてはならない」（佐久間 1929：500）と述べている。菅野（1989：15）は、「現代アクセントの一般的傾向」として「非活用語はアクセントの平板化が多く、活用語はアクセントの起伏化が多い」と書いている。この説に従っても、動詞は起伏化の傾向を持つことになる。

複合動詞のアクセント（起伏式優勢） → 少数派も起伏式へと変化の傾向
 複合形容詞のアクセント（起伏式優勢） → 少数派も起伏式へと変化の傾向

本稿では複合動詞についてはこれまでかなり詳細に見てきたので、複合形容詞の場合を見ておこう。ただし、日本語の形容詞はそもそも数が少ないし、平板式の形容詞の数はさらに少数派なので、複合形容詞のアクセントの変化の考察は複合動詞ほど容易ではない。それでも、平山（1960：911-912）を手掛かりに考えてみよう。複合形容詞のアクセントは、前部要素が動詞でも名詞でも後部形容詞のアクセントで全体のアクセントが決まるようで、後部形容詞が「起伏型」であれば「中高型」、後部形容詞が「平板型」であれば、「原則として平板型と中高型」とまとめている。本稿でのこれまでの表現方法で言い直すと、後部形容詞が起伏式であれば、起伏式になるが、後部形容詞が平板式であっても、平板式と起伏式の両方のアクセントが使われるとなる。神常1932からNHK2016までのアクセント変化を観察すると、複合動詞の場合ほど明瞭ではないが、起伏化の傾向がある程度は確認できるようだ。

	神常1932	→	NHK1943	→	平山1960	→	NHK2016
聞きづらい	①	→	①	→	①④	→	④①
ほど遠い	①	→	①	→	①③	→	①③
物足りない	①	→	①	→	①⑤	→	①⑤
手荒い	①	→	③	→	③	→	①③

「聞きづらい」「ほど遠い」「物足りない」は平板式だったものが起伏化していると言える明瞭な例であるが、他の場合は、もっと古い時代のアクセントが確認できないこともあるが、予想通りのアクセント変化とは言えない。ただ、ここにあげた例で見る限り、NHK2016のアクセントが元の形容詞の平板式ではなく、起伏式を含んでいるという点では共通していると言えるだろう。「うら悲しい」や「見づらい」にしても、NHKの6代のアクセント辞典で調べてみたが、どちらもNHK1966年版から採用されているが、当初よりアクセント表記は変わっていない。「うら悲しい⑤①」（NHK1966、NHK1985、NHK1998、NHK2016）であるし、「見づらい③」（NHK1966、NHK1985、NHK1998、NHK2016）である。

式反転アクセントの衰退の理由として、他に、相澤（1992：228）が注の5で触れている動詞の連用形と複合動詞から作られる名詞のアクセントの異同を考え、そこに言語変化の積極的理由を見いだそうとする説がある。名詞ならウケ

トリ①、動詞連用形ならウケトリ③となれば、名詞と動詞がアクセントで区別ができるということで、起伏化が積極的な理由から起きていると考えるのであろう。実際、ウケトル③という発音も普及しはじめているので、このアクセントの使用者にとっては、動詞ならウケトリ③、名詞ならウケトリ①になっているだろう。理解しやすい説であるが、果たして、名詞と動詞の連用形のアクセントの区別ができれば便利であると言えるだろうか。この説が正しいなら、連用形転成名詞の使用頻度の高い複合動詞がとくに起伏化への強い傾向を示すはずであるが、そのような傾向は、より式反転アクセントの衰退が進んだ現在でも示されているようには思えない。平板式が維持されているオチツク①の連用形がオチツキ③と発音される傾向があり、名詞のオチツキ①と区別があるということなどが示されないと、根拠のある主張にはならないだろう。ミオクルとミオクリ、トリカエとトリカエルなど動詞と名詞の両方の使用頻度の高い対は多数ありそうだ。合理的ではあるが、不必要な区別を持ち込む説になっていないだろうか。そもそもアクセントの保存関連ということで考えるなら、単純動詞であっても、起伏式動詞からは起伏式名詞が派生し、平板式動詞からは平板式名詞が派生する傾向が強いが、マナブとマナビのように、平板式の場合は³³動詞連用形と名詞でアクセントは区別がつかないし、現在、アクセントで区別しようという動きも報告されていない。

5. まとめとまとめ切れなかったこと

1章では、三宅（1934）で発表された複合動詞のアクセントの式反転規則について説明し、佐久間（1919）のアクセントの式の考え方を前提にしているため、アクセントの式の考えの普及後に三宅（1934）が複合動詞のアクセントの規則性としてまとめることができたことを述べた。また、アクセント式の考えがなかった山田（1892b）では複合動詞のアクセントの定式化が正しくはできなかったことを述べ、「山田美妙の法則」という誤解が先行研究でかなり見られるが、アクセント研究の先駆者としての山田美妙は、自由に、手探りで考察したための不備もあったことや、研究には実証性があまりなく、書いている内容が『日本大辞書』の動詞のアクセントにさえあてはまらない内容だったことにも触れておいた。しかし、式反転アクセントが本当に東京語の複合動詞一般に

³³ 起伏式動詞と派生名詞の場合は、派生名詞が尾高型になるので、同じ起伏式でも動詞と名詞ではアクセントの型がことなり、区別されることになる。カワク②の連用形はカワキ②だが、派生名詞の場合はカワキ③である。

あてはまる法則性だったのかどうかは、今後の検討が必要であることも述べた。その他、1章では、複合動詞の式反転アクセントのかなり廃れた現代の複合動詞のアクセントについての先行研究を紹介した。

2章では、NHKの2016年のアクセント辞典の内容から式反転アクセントの現況について調査した。前部動詞が起伏式で複合動詞全体が平板式を維持しているのは、どんな場合か考えた。前部が1拍なら後部は2拍でも3拍でも比較的式反転アクセントの優勢が保たれていた。前部動詞が1拍の複合動詞は、ほとんどがミ（見）とデ（出）であることも分かった。また、全体の拍数と式反転アクセントの維持傾向を関連付けるような記載が先行研究に多かったが、NHK2016の調査では、重要になっているのは、全体の拍数ではなく、前部動詞の拍数であることが明らかになった³⁴。前部動詞が1拍の場合に式反転アクセントが現在でも比較的良好に保存されていることと、拍構成が1+3に所属する複合動詞がかなり数も多く、式反転アクセントの平板式アクセントの強い維持傾向を持っていることを確認した。また、後部動詞のアクセント式も式反転アクセントの維持に多少の影響を与えていることも観察した。

3章では、式反転アクセントの維持ではなく、平板式アクセントが消失し、起伏化したアクセントだけの記載になっている複合動詞の割合を部位別（前部、後部、全体）、拍数別に出して、新アクセントへの移行が、やはり、前部動詞の拍数ともっとも関連が深いことを確認した。また、前部動詞の拍数が長くなると式反転アクセントが不適用になる現象は神保（1930）の敬語動詞のモーシアゲルの補助動詞用法でも観察できることをアクセント記載例とともにまとめた。

4章では、複合動詞の式反転アクセントの衰退がもたらす現在の状況についての私見を述べた。複合動詞の前部動詞のアクセントが保存されなくなるため単純動詞のアクセントが不安定化する場合があるのではないかということを実例とともに述べた。複合動詞の式反転アクセントの衰退は、不都合が生じるにもかかわらず、複合動詞全体の起伏化とアクセントの単一化・画一化が進んでいる理由については、複合語の起伏化の傾向一般との関連を指摘した。

最後に、本稿でまとめ切れなかったことも書いておきたい。1.1で述べたように、山田1892から三宅（1934）の時代までの複合動詞が本当に式反転アクセントの規則性を示していたのかということや当時のアクセント資料から十分に検討することができたとは言えない。複合動詞の1語のアクセントではなく、

³⁴ この式反転アクセントの維持の問題について、松森（2016：151）は「『前部要素X』の長さも関連している可能性が高い」と述べ、前部動詞の長さに注目した発言をしている。

2語のアクセントをもつことがあったかどうかの検討もできなかった。神保(1930)や三宅(1943a)のように小学校教材の全読章に対するアクセント付与という資料があるが、十分に活用することができなかった。さらに、三宅(1943d)では文語終止形の朗読アクセントの起伏化についても触れており、本来平板式アクセントになるべきところでも起伏式アクセントが使われる場合があるとしている。最後に、紹介しておきたい。

三宅(1943d:167) ※アクセント表記は数字式に変更してある。

「真一文字にすべりおりた」は文の勢ひでスベリオリタ②といふが、これを普通の話で「すべりおりた時に」などといふ場合にはスベリオリタ⑩時といふ。そこに終止形と連体形とのアクセント活用の相違があるわけである。「降りかかる」を本課でフリカカル④と読むのも朗読の終止形だからで(そこに上述の文語朗読的アクセントがある)、連体形ではフリカカル⑩であること勿論である。又、普通の話でもフリカカル⑩である。

まとめきれなかったことも少なくなく、複合動詞の式反転アクセントの本稿で扱いきれなかった問題は、考えがまとめられそうなら、稿を改めて論じたいと考えている。

【参考文献】

- 相澤正夫(1992)「進行中のアクセント変化—東京語の複合動詞の場合—」『研究報告集』13、国立国語研究所、195-265。
- 相澤正夫(1997)『『東京語アクセント資料』と辞書アクセント』『日本語科学』1、国立国語研究所、80-91。
- 秋永一枝(1999)『東京弁アクセントの変容』、笠間書院。
- 秋永一枝・坂本清恵(2010)『『(新)明解日本語アクセント辞典』からの報告』、アクセント史資料研究会。
- 上野和昭(1989)「近世における複合動詞のアクセント」『国語学研究と資料』、国語学研究と資料の会、35-46。
- 大西雅雄(1943)『正しい発音』、廣文堂。
- 菅野謙・白田弘・最上勝也・宗像朋子(1982)「NHKアナウンサーのアクセント19年の変化」『NHK放送文化研究所研究年報』27、271-334。
- 菅野謙(1989)「山田美妙のアクセントと現代共通語のアクセント」『大正大学大学院研究論集』13、71-94。

- 佐久間鼎 (1917)『国語のアクセント』、心理学研究会。
- 佐久間鼎 (1919)「アクセントの型及び式」、『国語の発音とアクセント』、同文館、8章：161-184。
- 佐久間鼎 (1929a)『日本音声学』、教文館、復刻版が1963年に風間書房から出版された。
- 佐久間鼎 (1929b)「アクセントの地方的相違」『国語音声学講話』、同文館、10章：114-132。
- 佐久間鼎 (1951)「アクセントの認識」『国語アクセント論叢』、法政大学出版局、19-34。
- 佐久間鼎 (1959)『標準日本語の発音・アクセント』、恒星社厚生閣。
- 塩田雄大 (2008)「アクセント辞典の誕生 放送用語のアクセントはどのように決められてきたのか」『NHK放送文化研究所年報』52、173-200。
- 塩田雄大 (2013)「NHKアナウンサーのアクセントの現在—複合動詞を中心に—」『現代日本語動態研究』、相澤正夫編、おうふう、236-258。
- 塩田雄大 (2014)「終戦前の辞典に示された複合動詞のアクセントをめぐる—帰納的記述と演繹的規範—」『国立国語研究所論集』7、251-264。
- 塩田雄大 (2016)「動詞・形容詞のアクセントをめぐる現況～進む一型化～」『放送研究と調査』AUGUST。
- 城岡啓二 (2009)「数詞ヨン・ナナ・キューの固有名詞への浸透について—地名、小字名、姓における四・七・九—」『人文論集』59号の2、静岡大学人文学部、73-105。
- 城岡啓二 (2011)「日本語の基本数詞シのヨとヨンへの言語変化について—ヨン化とヨ化を発音資料に探る—」『人文論集』61号の1・2 (合併号)、静岡大学人文学部、103-152。
- 城岡啓二 (2013)「日本語の基本数詞のナナ化とキュー化について—言語変化資料の整理と考察—」『人文論集』63号の2、静岡大学人文社会科学部、109-148。
- 神保格 (1925)『国語音声学』、明治図書。
- 神保格 (1930)『尋常小学国語読本の発音とアクセント』尋常1学年—尋常6学年、厚生閣。
- 神保格・常深千里 (1932)『国語発音アクセント辞典』、厚生閣。

- 高橋龍雄（1904）『国定読本発音辞典』³⁵、同文館。
- 高山林太郎（2012）「岡山市方言の複合動詞のアクセント」『東京大学言語学論集』32、東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室、305-332。
- 都竹通年雄（1951）「動詞の連用形とアクセント」『国語アクセント論叢』、法政大学出版局、383-412。
- 寺川喜四男・日下三好（1944）『標準日本語発音大辞典』、大雅堂。
- 永田吉太郎（1935）「旧市域の音韻語法」『東京方言集』（斎藤秀一編）、善峰社、18-143。
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房。
- 平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』、育英書院。
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』、明治書院。
- 平山輝男編（1960）『全国アクセント辞典』、東京堂。
- 馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料』上巻、下巻、文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集。
- 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（2012）『日本語アクセント入門』、三省堂。
- 松森晶子（2016）「複合語アクセントが日本語史研究に提起するもの」『国立国語研究所論集』10、135-158。
- 三宅武郎（1934）『音声口語法』、明治書院。
- 三宅武郎（1943abcd）『国民学校アクセント解説』1 学年用－4 学年用、国語文化研究所。1 学年用をaとし、順番に、4 学年用をdと表記している。
- 三宅武郎（1943e）「東京アクセントの形成について」『国語アクセントの話』、日本方言学会編、1-50。
- 文部省普通学務局（1918）『アクセントとは何か』。
- 山田美妙（1892a）『日本大辞書』、日本大辞書発行所。
- 山田美妙（1892b）「日本音調論」『日本大辞書』、日本大辞書発行所、附録：43-57。
- 吉澤典男（1952）「複合動詞について」『日本文学論究』10、国学院大学国語国文学会32-42。

³⁵ 辞典内では「国定国語読本発音辞典」の名称も使われている。